
面倒事が嫌いな少年

銀花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

面倒事が嫌いな少年

【Zマーク】

Z5303R

【作者名】

銀花

【あらすじ】

少年は知る。弱者こそが悪であり、強者こそが正義だと。少年は出逢う。最も真理に近く、最も真理に遠い者と。少年は想う。自分の正義とは何か。運命という一本の紐は絡み合い、運命という歯車は零れ落ちた。絡み合った運命は複雑怪奇な“外史”へと至り、零れ落ちた歯車は尚もその仕事を続ける。始原から終焉へと向かうただの機械。その果てに待つのがオワリか、それともハジマリか

1・闇夜の邂逅（前書き）

この作品は原作「ネギま！？」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

1・闇夜の邂逅

「どうしてこうなった……」

眼の前にはここに学園の女生徒を抱える小さな少女。
夜の帳が辺りには降り、月光がその者が持つ綺麗な金色の髪を照らし上げる。それと同時に眼に映る素顔。

それは本来なら去なくなつた筈である幻想種。
それも雑種と呼ばれる混ざりモノではなく、純粹種。
人はそれを”真祖”と呼んだ。

それはこんな日本のある学園の往来に居る筈もないのに、何故かここには存在する。

その者は”不死なる子猫”アナタシア・キティを名を持つ、闇の王。

「闇の福音」

「貴様、何者だ……？」

そんな呟きが相手の耳に届いたのか、吸血鬼である彼女は問うた。

女生徒を抱えながら、彼女は俺を警戒する。
いつでもどんな動作にも入られるように足に力を入れ、周りから奇襲がこないかを静かに確認していた。
流石は”闇の福音”。600年の年月は伊達ではないといつと
か。

「もう一度聞く。……お前は何者だ？」

「……」

そうは聞くが、改めて自分が何者かと考えるとどう答えるのが正しいのか。

それ以上に、本当に俺は何者なのだろうか。自分が何者なのかとということを、完全に理解している人間などこの世にはいない。だからこそ哲学という学問形態も生まれたのだ。

しかし、今はそんなことは然程重要ではない。

彼女もそんな問答には興味もないだろう。

彼女が言う何者かということが持つ意味とは、多分自分が彼女の敵かどうかということ。

それで考えると、俺は彼女の敵ではないだろう。

ここに辿り着いたのも、学校の授業を終え、暇つぶしに街へと繰り出しプラプラと時間を潰して、最終的に散歩しながら返つて来つてこの場に出くわしたのだから。

それに彼女と敵対するということは間違いなく戦闘になるだろう。それは面倒だ。

大体、"真祖"であるという点もあるし、それ以上に600年間培つてきた経験というものは非常に厄介だ。それは時として"真祖"以上の価値を生む。

それに比べ、俺は14年しかまだ生きていなく、彼女に比べればひょっこ同然であるし、また彼女ほど場数を踏んできた訳でもない。確かに、俺もそれなりの"経験"は持つているが、流石に"真祖"と殺り合つた経験など皆無だ。というよりも、最上位幻想種と殺り合つたことがない。

それより、もう"裏の世界"に戻ることは懲り懲りなのだ。

ただでさえ、生まれてすぐに戦乱の地に放りだされ、生きるのこ 必死だったのだ。そろそろ楽をさせてくれてもいいだろう?

大体の話、何で俺がこんな世界最強クラスと殺り合わなくちゃならんのだ。

世界最強クラスなど、あの”千の刃”と殺り合つてからもう戦うのは止めると決心しているんだ、こっちは。

てか、よくあの時生きていたと思う。あつちから停戦を結ばれなかつたら絶対に俺はこの世にいなかつただろう。まあ、それから仲良くなつて色々と助けて貰いはしたが。

閑話休題。

今はこれをビリヤつて回避するかが先決か。

とりあえず、自分は敵ではないということを示す方法を考えよう。やはり会話というのが常套手段か。折角言語という人類しか持ち得ない素晴らしい文化があるので。これを使わずして何を使うのか。

「俺はお前の敵じゃない」

「ふん、そんなことを言つて後ろからグサリか？ そんなものには騙されんぞ」

何だ、この人間不信は。

確かに彼女の生い立ちから考えたら理解出来るが、まさかここまで酷いものだとは。

しかし、これでは俺が言つて全てを信じて貰えないだろう。

さて、どうするか。

思考に思考を重ね、それを以て思考を展開させるが、これについて妙案は浮かばない。

というより、先ほどから段々と彼女がいらっしゃり始めているのがわかる。顔が面白いほどに歪んできてるからな。

そういえば、何故彼女は吸血活動をしているのだろうか。それを言えば、何故彼女はこんな場所にいるのか。様々な疑問が浮かぶ。

「貴様……ッ」

「まあ待て。それより一つ質問をしてもいいか?」

「……何だ?」

訝しみながらも、俺の質問に答えてくれるようだ。

「一つ目の質問、何故お前がこんな日本の学園にいるんだ?」

「……」

俺の質問に口を開ざす彼女。

しかし、それは答えににくいといつよりも、何かを思い出している表情。しまいに、その表情は崩れ、憤慨しているかのよつこまで変化した。

流石の俺もそれには顔を引き攣ることしか出来なかつた。まさかいきなりそんなことになるとは。

「……答えにくうことなら無理には聞かない」

「……やつしてくれる助かる」

どうやら苦労は人一倍しているようだ。

「一つ目の質問、何故吸血活動をしている? これも答えにくかっ

たら別に問題はない」

「……そうだな。ただ、必要だからとだけ答えておこうか」「必要……?」

その言葉に疑問を持ちながら、今暫くしてある一つに気がついた。

彼女から魔力がほとんど感じられない。

”真祖”という存在は魔力が馬鹿デカイ筈なのに、彼女からはそれが欠片すらなかつた。

まあ人間では魔力だけに限つて言えば”真祖”よりも多い奴だつて存在する。

例えば”サウザンドマスター”や”サムライマスター”的娘、それに俺だつて多分眼の前の”真祖”が持つ魔力総量よりも多いと自負している。

実際、”千の刃”と相対した時に、俺は”サウザンドマスター”より魔力総量が多いと言われた。

逆にあいつの気の総量は可笑しいと笑えるくらいだつたが。

「まさか……、お前封印されているのか？」

「ほお？ 気付いたか。だが、それに気付いてどうする？ 私は殺すか？ それとも”正義の魔法使い”に突きだして懸賞金を貰うか？」

その事実に気付いた途端、彼女は嘲るような笑みを浮かべてちらを見る。

そんな表情を向けられても、俺がすることは変わらない。

「だから俺はお前の敵ではないと言つてたるだろ……」

「……本当に敵対する気はないのか？ じじいの手駒とか」

「じじい？ ああ、こここの学園長のことか。俺は全く関係ない存在だよ」

「……そつか」

安心した表情を浮かべる彼女を見て、これでようやく危機は去つ

たと俺はその時思つた。

しかし、それは大きな間違いであつたのだ。

安心の表情から一転、彼女は獰猛な笑みを浮かべてこちらを見た。

「ならば貴様には今日の記憶を失つて貰わねばならん。許せ？ 私にも引けない事情つていうものがあるんだ。ここでお前の口からじじいにでも情報が伝われば、私の計画は全て泡となつて消えてしまうからな」

「……待て待て。だから言つてるだろ？ 俺はお前と敵対する気など一欠片も持ち合わせてないし、学園長とだつて顔を合わせたこともない。そんな奴がお前が吸血活動を行つてると言つても全く信用される筈もないだろ？」

おかしい。

本当ならここで笑顔で別れられる筈だつたのに。どうしてこんなつた？

俺はどこで選択を間違えたんだ？

糞ツ、殺氣なんか発してくるなよ、この馬鹿ツ！

「口ではいくらでも言えることだ」

そう言つて、彼女は懐からいくつかの試験管を抜きだす。どうやら本当に封印されているらしい。

ということはあれは魔法を発動する為の補助道具といつことか。あれくらいならそこまで大きな魔法は使えまい。精々中の下くらいのものだろう。それくらいなら危険はない。

しかし、しかし。

ここでもし敵対なんかしてしまえば、俺は一生彼女から恨まれ、狙われる人生を送ることになるだろ？

それだけは御免だ。

もう俺はあんな血に塗れた人生を歩くのには疲れたんだ。
その為に態々こんな場所で学生をしているんだ。こちとら、将来
の夢は『立派なサラリーマンになることです』って進路表に書くく
らいの勢いなんだぞ？

それなのに、こんなところで人生設計を棒に振つてたまるか。

だが、どうする？

彼女と敵対するのも嫌だが、それ以上に傷つくことがもつと
嫌だ。

このまま無抵抗ならば多大な痛みと共に氣絶するだらう。それと
同時に多分だが血を吸われる。

どこかで伝え聞いた話だが、真祖の吸血鬼に血を吸われると従順
な僕へと変えられてしまつらじい。これももつと嫌だ。

思考する時間が足りなさすぎる！

既に彼女は試験管を手に持ち、詠唱を始めている。

今の彼女ならば、相手にするのは楽勝だ。魔法を使う為に補助を
しなければならないほど、彼女は弱っているのだから。

”魔法の射手 氷の17矢”！

だから俺はこの手段を取ることにする。

「何ッ！ 障壁だとッ！？」

「俺はお前の邪魔はしない、これだけは約束しよう。ではさりばだ、
”真祖”よ」

俺はそのまま”水のゲート”を発動し、その場を離れた。

後から思い返してみると、初めからそうやってあの場から離れて

おかげよかつた。

何をしていたんだ、俺は

…

1・闇夜の邂逅（後書き）

とりあえず時間稼ぎで駄文第三弾をお送りいたします。

今回はネギまで、ヒロイン予定は三人。最終的にくつつくのは何人になるかはわかりません。ハーレムになるかもしれませんし、もしかするとくつつかない可能性も。

まあどの小説に関してもハッピー エンドを目指すので鬱展開などにはならないかと。

色々とオリキャラが出てきますが基本的には敵対関係です。大抵は主人公に負けたり主人公勢に負けたりしてそのまま出てこなくなるので、オリキャラが苦手という方もそこまで忌避感は感じないかと思します。

あ、後は野菜少年のアンチはありません。というより主なアンチはないと思つて貰つて構いません。

とつととメインを更新したいんですけどねえ……。

時間つて過ぎ去るばつかで。欲しいなあ、時間……

追記・誰も突っ込んでなかつたけど、前書きの所、ネギまにしておかなければならぬところが東方のままだつた（笑）
貼り付け修正するの完全に忘れてたなw

2・再開（前書き）

この作品は原作「ネギま！？」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

彼女 エヴァンジェリン・A・K・マグダウェルはイラついていた。

その原因は単純であり、数日前の出来ごとについてのことだった。あの後、正体不明の少年にまんまと嵌められた彼女は途方に暮れ、そして逃げられたことに気付き、大いにキレた。

そしてそれに伴つて現れる不安感。

あの少年は自分は敵ではない、情報は流さないと言つていたが、そう簡単に信用出来るものではない。

元々、人間とは嘘を吐く生き物だ。

それ故、彼女は安心して過ごすことが数日の間続いた。

しかし、いつまで経つてもアクションは起きなかつた。

まさか、本当にあいつは自分と敵対するつもりはないのか。だが、それによつて得られる利は？

確かに私と敵対しないで済むという利は得られるが、そうするならば情報を流し、私の行動を制限を掛ける、もしくは自分が持つ力で滅ぼす。私ならそうするだろうし、あいつの力量ならそれをするくらい朝飯前だつたろう。魔法の中でも高位に属する”ゲート”の魔法を扱える者だ。本国のランクなら最低でもAクラスはある。

だが、あの少年は何らのアクションも起こさなかつた。

それについては彼女にとつてはいいことなのだが、どうにも腑に落ちず、彼女はずつと悶々と考え方を続け、それによりイラついていたのだ。

「どうしたのですか、マスターは？」

彼女の従者であるガイノイドの茶々丸が椅子の上に座っている人形に話しかけた。

これは別に茶々丸が少しおかしい人物というわけではない。

机の上に座っている人形はチャチャゼロと言い、エヴァンジェリンが使役する従者の一人であり、また茶々丸の姉に当たる存在なのだ。

「ケケケ、ドウセマタアノ男ニツイテ考エテルンダロウヨ」

「あの男というと、マスターが言つていた魔法使いのことでしょうか？」

「アア。コノ学園ニハ魔法生徒ハ少ナカラズ存在スル。ダガ、御主人ハソノ中デソイツを見タコトガナカツタンダトヨ。本来ナラ魔法生徒トハ全員顔合ワセヲシテイル筈ナノニナ」

ケケケと不気味な笑い声を上げる人形と、それを見詰めるロボット。

不思議な光景だが、この麻帆良学園ではそれほど不思議とは扱われない。

この学園には様々な奇人変人が多数存在するので、彼女達の不思議さもそれらに埋もれてしまう。

「チツ、少し出掛け。付いてこい、茶々丸！」

「お供します」

「にしてもこの間はヤバかつたなあ。まさかここに”真祖”なんて化物が存在してるなんて誰も思つてねえよ……」

少年 海原昌はそう独りごちた。

数日前の夜、危なげない方法で戦線を離脱したあの時のことを振りかえる。

下手をすれば戦闘になつていたあれは、正直もう駄目だと思った。

「ま、最近は周囲の警戒を怠つてないからそういう問題なんて起ころ訳？」

「ん？」

「どうかしましたか、マスター？」

「「ああツー？」」

「な、何でこいつがここにいるんだよっ！」

「ちゃんと術式がつて、発動してねえつー？ 何でつーておい！ そういうや最近使つてなかつたから最後に使つた時と同じ設定になつてるじゃねえかツー？」

最後に使つた時の設定が常時展開じゃなくて半田の設定になつてるので氣付かなかつた。

御丁寧に一日一回ちゃんと起動するもんだから、ずっと発動していると誤認していたようだ。

「貴様は……ツー！」

「よ、ようー！」

「うあえず片手を上げて挨拶をしてみる。

ここは天下の往来だし、時間はまだまだ夕暮れと呼ぶには早い時間帯。そんな中で襲いかかってくることもないだろつ。もしそうなら、態々この間みたに深夜、それも人に見つかなによつに吸血行動をする筈がない。

俺は友好感溢れる笑顔を浮かべ、危険はないということを相手に知らせる。

しかし、彼女は人間不信という厄介な病気を持ち合わせていた。

俺がどれほどフレンドリーに対応しようと、全てが偽物に見えてしまつらしい。今でも警戒した顔つきで俺を睨んでいる。

そんな彼女の様子に一緒にいた女性も戸惑いを覚えたようだ。
「そういえば彼女は誰だ？ 友達？ それにしては呼び方がおかしかったような。いや、そういう付き合いなのかかもしれない。全てを否定するだけでは人間駄目だ。

いくら自分では受け入れきれないことでも、相手がそれを受け入れているのならそれは認めてやるべき事柄だ。

偏見など持たないわ。ただ、少し距離を取るだけで。

「おいっ！ 何か可笑しなことを考へてるだろっ！」

「いや、大丈夫だ。いくらお前が百合百合しい関係性を構築しようと、その相手に『主人様^{マスター}』だと呼ばせていても俺は認めるさ」

菩薩のような笑みを浮かべ、俺は彼女達を見た。

それにしてもどちらも美人なのに勿体ない。片方 真祖ではな
い方 は俺の好みの容姿なのに。多分性格も俺好みの性格なんだ
ろうな。

はあ、何で俺もモテないんだろ。やっぱ不細工^{アラジン}なのかな。クラスの女子の方に顔を向けたらいつも逸らされるし。顔を赤くするほど嫌われてるつてよっぽどよ。

表面では菩薩のような笑みを、内心では嫉妬と悔しさを孕んだ涙を流す俺。何というか凄い。

しかし、俺の言い分が気に入らなかつたのか、真祖の彼女が言い返してきた。

「誰が百合百合しい関係かっ！？ コイツは私の従者だっ！」
「従者つて……、そんなプレイ内容を俺に聞かされても」「だから違うといつてるだろっ！ あれだ、”魔法使いの従者^{マジスティカル・マギ}”だ

！」

「いやわかつてゐよ。てか、こんな往来でそんなことを叫ぶな。魔法は一般世界では秘匿情報だる。そんなことも知らないのか？」

「うがあ——つ！ 全部お前のせいだらうがつ！」

「マスター、落ち着いてください」

少しからかい過ぎたか。

しかしこの真祖、思つた以上にいい反応をするな。ここまでイジられキャラで面白いとは相当だぞ。

にしても魔法使いの従者ミニスター・マギか。

パツと見た感じ、戦闘能力は本国ランクでAの上下幅というくらいかな。観察してみたら人間じゃなくてロボットだったし。一体誰だよこんなロボットを作つたのは。明らかにオーバーテクノロジー過ぎだる。意思みたいなモノも持つてるし、完全自立型かい。俺も欲しいな。

ゴホンッ。

このくらいなら、二人一緒に戦う結果に陥つても負けることはなさそうだな。

真祖の呪いが解かれたら問題ありがだが、今のところ解けていないようだし。

「はあはあ……、そりいえば貴様、名前は？」

「興奮するなよ。後、その質問に対しても黙秘権行使させて貰つてもいいか？」

何かここで名前を教えると後々面倒事になりそだから却下。

「原昌さんですね」

「そうそう、俺の名前は海原昌

「つておいつ！ なに勝手に人の個人情報を検索してんだよ。個人情報保護法で訴えるぞっ！」

「ほほお。海原昌と言うのか……」

「お前も普通に聞いてんじゃねえよ、エヴァンジェリン・アナタシア・キティ・マグダウエル！」

「そう私こそ魔法世界で恐れられた つて！？ 何故お前が私のミドルネームを知ってるんだ！ それを知ってる人間なんか他に数人しかいない筈なのに！？」

「俺の情報網舐めんなよ？ つてのはどうでもいいんだよ」

確かにこいつのミドルネームは結構知られてないよな。
俺も偶々拾い上げただけだし。

「とりあえず俺には交戦の意思はない。それを了承してくれるな
どこの喫茶店で話そう。返答は？」

「……是、だ」

「OK。ならここにでも入るか」

俺が指差した方には偶然喫茶店が存在した。

それにエヴァンジェリンは頷き、相方を呼び付ける。

「茶々丸も付いてこい」

「了解です、マスター」

中に入つたら会話の内容が耳に入つて来ない結界を張らないとな。

とりあえず席に着き注文を終える。

俺はエヴァンジエリンに一声掛けてから結界を張る事にした。
下手に何も言わずにやつてしまつと、また勘違にされる恐れが出てくるからな。

「エヴァンジエリン、会話の内容を聞かれない様に結界を張るだ？」
「……わかった」

了承が取れたので俺はすぐに結界を構築する。
ほぼノータイムで構築を完了し、それを見たエヴァンジエリンが感嘆の声を漏らした。

「軽い認識阻害の術式とはい、結界魔法を一瞬で発動するとはな

お褒めに預かり恐悦至極、ってな。

後はゆっくりと話すだけだ。

俺は注文したアイスティーで喉を潤し、そして口を開く。

「まあ名前は知られたが一応自己紹介を。俺の名前は海原昌。ここの中等部の2年だ」

「……私のことは知っているから問題ないだろ。茶々丸、お前は自己紹介しておけ」

「わかりました。私の名前は絡操茶々丸です。よろしくお願いします」

「いらっしゃいぞ。少し質問だけど、絡操って口ボットだよな？」

「茶々丸で構いません。マスターの友達ならそう呼んで貰つても」

「待て。いつコイツが私の友達になつた？」

「あれほど楽しそうに会話をしておられたマスターは初めて見ま

したから

無表情でそう告げる茶々丸。

俺には本当にそう思っているのかイマイチ判断出来ないが、エヴァンジエリンの反応を見るに本当にそう思っているのだろう。

「「マイツと私は断じて友達なんかという関係ではないっ！」

またここでイジつてもいいのだが、そうするといつまでも話しが始まらないのでここは打ち切つておく。

「はいはい。それで茶々丸？」

「そうですね。正確にはガイノイドと呼ばれるものです」

「へえ……、誰が作ったか教えて貰つても？」

「はい。この学園の超包子オーナーの超鈴音さんと葉加瀬聰美さんです」

超包子は何度も食べに行つたことがあるから知つていて。

そうか、あそこのオーナーが作ったのか。そういえば天才という噂を耳にしたことがあるな。葉加瀬という方も珍しい名前だったから記憶に残っている。どちらも中学生の年齢にして大学の研究室に入つてゐるという天才の中の天才共だ。確かにあの二人ならロボットの一つや二つくらい作れそうだ。

「ふむ……、純科学かと思っていたが、魔術方面の知識も取り入れてるのか」

もう少し詳しく解析してみると、動力は魔力運用によつて動いているらしい。

茶々丸本人はロボットなので魔力を自分で作りだせない筈なので、

外部からの供給によつて罷り通つてゐるか。

中々興味深い。科学と魔法の融合とはいやはや。

「それより貴様……、何者だ？”“ゲート”の魔法もそうだが、茶々丸を一目見てそこまで詳しいことを理解するなど一般人には到底不可能だ

エヴァンジエリンが口を開く。

それはこの間から常々考えていた事柄だらう。

しかし、だ。

俺も素直に答えることが出来るのか。この日本では特に行動など起こしていないので、一般人でも通る筈だ。だが、”あちらの世界”のことになるとそれはもうトップシークレットで教えられない。俺の正体を知っているのは”千の刃”と”第三皇女”くらいだ。大体、”第三皇女”に俺の素生がバレたのも全て”千の刃”のせいだ。何が良い所に連れていつてやるだ。というか俺もそれにホイホイ付いていくなよ。

閑話休題。

さて、本当にどうするか。

やはりここか嘘をつくに限る。しかし、全てを嘘で固めてしまうとそれは完全な嘘ですぐにバレてしまつだらう。どこかで聞いた話だが、本当の嘘つきとはたくさんの本当に少しの嘘を混ぜる者を言つうらしい。俺もこれに従つてみることにする。

「確かに俺は”裏の世界”について少しは知つてゐる。が、この学園では全く関係のない部外者という立場だよ」

”少し”ではなく”大半”だが。しかし、ここでは部外者という

」とは正しい。

魔法生徒でもないし、学園長やデスマガネと知り合いでもなんでもない。

「……なら何故貴様ほど使い手がこの学園で学生なんかやつているんだ？ 貴様ほどなら”あちらの世界”で十分名を馳せられるだろ？」

それはお前も同じだろ？

「なら聞くが、”あちらの世界”で名を馳せるに如何ほどの価値があると言うんだ？」

「立派な魔法使い（マギステル・マギ）”の称号を得られるだろう？ それだけでそれ相応の暮らしが約束される筈だ」

「立派な魔法使い（マギステル・マギ）”ねえ……。俺はあの糞みたいな集団は嫌いなんだ」

立派？ 正義？ ハツ、あいつらのどこにそんな要素があるというのか。

やつていることはただの暴力。正義の名の下に民衆を殺している殺戮者の間違いだろ。

確かに本当に立派な奴もいるがそれは少数で、大半が今言つたみたいな糞みたいな奴しかいない。大体、大半の者が”正義”に陶酔していて、その本質を見極めようとしていない。この学園にいる魔法関係者の殆どがそれだ。辛うじて学園長やデスマガネ、それに数人の魔法教師くらいはまだ少しだけ理解していると言つたところ。

俺の言葉に些か驚く二人を尻目に俺はアイスティーのおかわりを注文する。

「ほう？ 中々珍しい考え方を持っているじゃないか」「そうか？ 僕が生まれ育った場所なら大半の奴がこんな考えだよ

あそこは他人任せな人間など全て死んでいく。

信じられる者は自分のみ。まるでそれを体現するかのような場所だった。

自嘲気味にそう呟くとエヴァンジェリンは申し訳なさそうな顔を向け、「スマン」と一言呟いた。人の機敏をハッキリ捉える、それは重ねた年月故か、はたまた性格の為か。

「気にするな。先ほどの質問だが、だから俺はここにいるんだ。ここは平和だろ？ そんなことを考えずに過ぎせる天国のよつな場所……」

別にここでなくても良かつたのだが、日本で一番いい学園がここだつたから選んだまでだ。

他の国だと治安などが少し悪く、平和を満喫することが困難だが、それに比べ日本は馬鹿みたいに平和な国だ。最早それは平和ボケと言わても言い返せないほどに。

それにこの国は他国に比べ娯楽商品や施設が溢れている。街を歩けば本屋やゲームセンター、少し遠出をすればアミューズメントパークなど、旅行をすれば温泉。色々な娯楽が存在する。だから俺はこの国を選んだのだ。

「ふんっ……、信頼はしないが、少しだけ信用してやる」「どうか……」

少しだけ誰も口を開かない。

その間、俺はおかわりをしたアイスティーを飲み干して行く。すると、茶々丸が何かに気付いたのかピクッと身体を震わせ、荷

物を入れて いる鞄に手を入れる。そこから出でたのは携帯電話で、

茶々丸は「失礼します」と一言いれ、その電話に出るのだった。

少しの会話の後、茶々丸は携帯電話を切り、そしてマスターであるエヴァンジエリンの方に顔を向けた。

「マスター、どうやら”仕事”的”のようです。学園長がお呼びします」

「チツ……」

そう言って、二人は席を立った。

「”仕事”か……。俺は手伝えないから応援だけはしておこう。後、

こここの金は俺が払つておくからすぐに行つても構わないぞ?」

「……次会つた時はこちらが何か持て成そう。行くぞ、茶々丸

「はい。……あの海原様」

「昌で構わんけど、何か用か?」

一足先に店の外に出たエヴァンジエリンと対照的に茶々丸は未だ残り続け、俺に話しかけてきた。

何か用事かと思い、俺もそれに答える。

「これからもマスターのことによろしくお願ひします」

「……はあ? どうこうことだ?」

全く意味がわからない言葉を投げかけられ、流石の俺も首を傾げる。

「それだけです。では失礼します」

綺麗な一礼の後、茶々丸は去つていった。

結局、彼女が言つことの意味は理解出来ずに終わる。

つて、俺は平穏な生活を送りたいって言つてるだろつ！？ 真祖
なんかに関わつたらそれもおじやんじやねえか！ 誰も関わりたく
ねえんだよつ！

そんな虚しい俺の叫びは誰にも届かなく消えていった。

若干アンチっぽい表現がありました。まあ気にしないでください。というより、アンチの定義って何なんでしょうか。Wikieで検索してみたところ、色々な定義がありましたが、こういう創作物に限つて言えばどのところがそうなるのか。

文中からも察せられる通り、昌は正義を毛嫌いしている訳ですが、その必要性というのも理解はしています。世界の人間が一致団結し、そして安心を得るには明確な正義と悪が必要になつて来ますから。

話は変わりますが、私の創作物でのアンチについての考え方。
簡潔に述べてしまえば、『相手の長所を見ず、短所だけを指摘し、自分の短所を指摘せず、自分の長所を相手に押し付けようとする輩』です。

言葉に並べてみると鬱陶しい存在ですね、これ。しかもその輩の長所が破綻していればなお鬱陶しいです。

昌の場合は自分の長所短所を明確に把握し、特に相手に押し付けようとはしません。題名通り、面倒事が嫌いなのです、彼は。物語の都合上、そんな戯言は道路の溝に放り捨てられるわけですが。結果、出来るだけ他人と関わらずに生きようとして、敵対した場合は正義、悪関係なしに潰しに掛かる訳です。

信ずるものは己だけ、を地で行く存在ですね。

3・面倒事（前書き）

この作品は原作「ネギま！？」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

漆黒の闇が辺りを覆う中、幾つかの影がその中を疾走する。

そこには一般社会では異形や化物と呼ばれる鬼という妖怪と太刀のような刀を持つ少女が存在した。また、その後方には美女と言つても差し支えがない者がいて、彼女は普通なら似合わない筈の銃器を手の持ち発砲している。その姿は何故か似合つていると感じてしまう。

銀閃が煌き、また一人の鬼が元いた世界へと還つて逝く。

銃器を持つ彼女が弾を穿てば、それも同じように鬼を貫き殺す。そこは一人だけの壇上とまで言いたくなるが、如何せん相手の数が多すぎる。

戦いの一つの要因として、数が多いほど有利であるということ。これは誰にでも理解出来る。数が多いということは、それだけで相手よりアドバンテージを取ることができ、また一人一人死のうとも、三人四人目で相手を倒せばいいのだから。

しかし、反対に彼女達には仲間がいなく、そこにいるのはただ一人だけ。しかも長い間戦い続けたのか、身体からは汗が大量に流れ、また着ていた服は所々破けている。

今はまだ大丈夫だが、それも後十数分というところで、それを超えれば間違いなく彼女達は鬼に殺されてしまうだろう。

しかし、それでも彼女達は弱音を吐かない。

一人は大切な人の死に様を覚えているから、一人は大切な人を守る為。だから一人は奮闘する。

仲間との連絡はつかない。どうやら通信妨害の結界を辺りに張ら
れているらしい。

二人はその事実に気付いた時、盛大に舌打ちを上げた。

「どうする龍宮つー！ こままではジリ貧だぞつー！」

刀を振るつている少女が、もう片方の少女に叫んだ。

叫んでいる間でも斬閃は全く狂わず、前から迫りくる鬼の首を綺麗に切り落とす。

切り落とした瞬間に横から新手が手に持つ鉄塊を振りおろしていくが、彼女は焦らない。鉄塊が頭に激突する間際、彼女を狙つていた鬼は消滅する。ダンツ、ダンツ、と後ろからの援護射撃が降り注ぐ。

普通の銃器ならば鬼に対してもほどのダメージは入らないのだが、彼女が使つている銃器は違法改造物であるし、また使つている弾も破魔の属性を持つ特別弾だ。鬼のような魔に属するモノは多大なダメージを与えることが出来る。

「そつは言つてもね……ツ！ 援軍への連絡はつかないだろ？ それなら私達がどうするしかないじゃないかツ！ チツ、刹那！ 三時の方向を叩つ斬れツ！」

龍宮と呼ばれた少女が叫ぶ。

その声を聞いた片方の少女は相方の言つことを信頼し、全力を以てその方向に斬撃を放つた。

氣を十分に伴つた斬撃は三体の鬼を一瞬で絶命へと追いやる。

ここまで、彼女達は累計で百体近い鬼を葬り去つた。

普段の仕事の内容ならこれの五分の一も倒せば多い方だというのに、今回はそれすらを簡単に上回る量の敵を相手にしていた。

普通の術者ならこれだけの鬼を召喚することはまず不可能だ。ならば高位の術者？

いや、それは考えにいく。これだけの鬼を召喚出来る術者ならば、

態々これだけの鬼を出してまで戦わせる意味がない。それなら自分が前に出て彼女達と戦う方はよっぽど効率が良いし、また無駄な魔力を使わずに済む。

ならば考えられることは？

一つ目は命を代償に大量の召喚に成功したということ。これならば確かにこれだけの量の鬼を召喚する事が可能だろう。命というものは太古の昔から最上級の贊の材料として知られている。それは日本でも同じことで、人身御供などが最たるものだ。

二つ目は元々札に封印していた鬼を放出しているということ。これならば高位の術者が封印していた札さえ持つていれば、下位の術者でも操れる。最初からそういう設定にしておけば好きなように操れるだろう。

三つ目は高位の魔道具を使用しているということ。魔道具の中でも召喚に関するモノならば、こうして大量の鬼も召喚出来る筈だ。

ざつと考えを上げてもこの三つ。

もつと時間があれば他の方法も考え付くのだろうが、今はこれくらいしか思いつかない。

「（もし）一つ目ならば私達にどうすることも出来ない。既に蛇口は壊され、後は水が出てくるしかないのと同じだ。二つ目ならこの中で一番対処は簡単だ。術者を探しだし、その術者を行動不能すればいい。三つ目の同じような対処で大丈夫だ。」

マグナムの弾倉を引き抜き、新たな弾倉を装填する。

「（これ以外の方法でこれだけの鬼を召喚していたのなら、今の私達には対処不可能。つまり、死……というわけだ）」

チツ、と舌打ちを一つ吐いて、また銃を乱射していく。

マガジンの数もあと残り少ない。刹那が言ったようにこのままではジリ貧だ。

ならばどうする？ 術者を見つける為に特攻を掛けたか？ いや、今の状態ではそれすら行つのも危うい。私と刹那が万全の状態ならば選べる手段だが、今は両方とも疲労困憊。そこで特攻など選ぶものなら間違いなく死が訪れるだろう。

刹一刻と限界は近づいてくる。

私はまだ余裕があるが、刹那の方はもう既に限界だろう。私と違ひ、あの軍勢の中を駆け巡り、氣と体術を限界まで行使しながら戦っているのだ。それに対し、私はマグナムをぶつ放しているだけ。疲労に差が出るのも仕方がない。

そう思つていたのも束の間、どうやら刹那には限界が訪れたらしい。

握っていた刀が弾かれ地面へと落ちる。

それを好機とばかり見た鬼どもが刹那に殺到した。

「刹那 ッ！？」

私は鬼どもに相方が蹂躪される光景を幻視した。
しかし

「 果てろ」

突如黒尽くめの存在が現れ、一瞬にして十以上存在した鬼を屠つたのだった。

エヴァンジエリンと別れ、俺は気儘にブリーフリと街の中を散歩していた。

辺りは既に夕暮れを超えて、完全に夜という時間帯。俺はそんな中、家に変える為に道を進んでいた。

しかし、ふと奇妙な感覺に襲われる。

それはどこかで戦闘が繰り広げられている感覺。

そういえば、エヴァンジエリンは“仕事”と書いて俺と別れた。その“仕事”については、この学園の“裏事情”についてのことだろう。

ならばこの感覺も説明がつく。ビーフセビーハの馬鹿がこの学園に侵入してきて、魔法教師なんかと戦闘しているのだろう。

関係ないとばかり、俺は歩く速さを落とさない。

俺の中のナニカが告げている。速く家に戻らないと面倒事に巻き込まれると。

辺りを見渡し、周りが人を確認してから“ゲート”で家に戻ろうとした瞬間、巻き込まれた。

高位の結界が辺りを覆い、俺の逃亡を防ぐ。

舌打ちを零し、まずその結界をどうにかしようとした解析を掛けていく。

「……何でこんなところで概念兵器　　とまではいかないけど、上位の魔道具が使われてんだよ」

解析の結果、分厚めの魔道具辞典にも載っているような上位の結界魔道具が使用されていることが判明。

だが、これくらいの結界なら数分で破ることが出来る。

俺は解析の情報に基づいて、結界の穴を探して行く。態々こんな

ことをするよりも、魔道具を使用している本人を探しだして殺す方が早いのだが、それだと間違いなく面倒事に一直線だ。ならば時間は食うが自分で結界の解除をするというものの。

しかし現実はそう甘くない。それに俺は神に嫌われているようだ。

「チッ……、こんなところにも麻帆良の関係者がいたのか」「どうする？」
「そんなことわかりきついているだろ？」「

三人の怪しげな男が俺の前に姿を現し、そのまま三人で会話する。おっと、雲行きが怪しくなってきた。面倒事に巻き込まれる臭いがプンプンするぜ！

そんなことを考えた瞬間、戦闘に立っていた男がこちらに突撃してくる。

後ろの一人は詠唱を開始。どうやら西の人間じゃなく、ただここの重要物を狙っている魔術組織の一員らしい。

後五歩というところまで男は迫り、その瞳には「殺つた！」「という確信が映るが、それは間違いだ。

手を伸ばせば握っている短剣で俺を突き刺せそうなどここまで近づき、そしてその男は細切れとなつた。

えつ、という表情の後ろの一人。完全にこの光景に呆気に取られ、詠唱すら忘れ茫然と突つ立つている。

俺は片手を振るう。それだけの動作でもう片方の男も細切れとなつた。本来なら血が吹き出る筈が、氣化したのか一滴たりとも地面を汚していなかつた。臭いもなく、ただそこには細切れになつた元ヒトであった物体のみ。それも細か過ぎて、誰が見てもただの道端に存在する塵にしか見えないだろう。

「あ、え？」

「俺の質問に答える。拒否は許さん」

俺は惚けている男の眼の前まで一瞬で詰め、捕縛魔法を使用し地面へ転がす。

「お前達は何者だ？」

「え、いや……」

戸惑う男を無視し、俺は首元に氷の刃を出現させる。

ヒツ、と怯える声を上げるが俺は構わず喉元に突き付けた。そこからツワーと一筋の血が流れ出す。

男に現れる表情は最早恐怖しかなく、涙すら流す勢いだった。

「もう一度聞く。お前達は何者だ？」

「お、俺達は”久遠の廻廊”という組織の人間だっ！」

久遠の廻廊……、確か違法研究を主に、人体実験、人身売買と幅広く活動している魔術組織だったか。

その危険度は本国ランクで言えば第一級と高く、組織に掛けられていた懸賞金もそれなりの額だった筈。

しかし、何故そこまでの大物がこの学園にやつてくる必要がある？
確かにここはそういう方面の人間からすれば宝の山かもしけないが、ここまで大物が欲しがるようなものは置いていなかつた筈だ。

俺が知っている最大の物を上げるならば、こここの学園の中央に存在する世界樹”蟠桃”だが、あれをどうにかすることなど無理だろう。あの樹は一種の靈脈になつてゐるし、実際にあの地下には龍脈も通つてゐる。いくら”久遠の廻廊”が総力を上げても、それを操

る」ことは不可能。

ならば他の物を狙つていいのか？

「次の質問だ。お前達は何故この地へと赴いた？」

「そ、それは……」

「5、4、3」

「ツ！ わかったっ！ 言うから命は助けてくれっ！？」

「ならば早くしろ。俺は気が長い方ではない」

顔面蒼白で涙どころか鼻水まみれの男は懇願する。
にしても、コイツは下つ端だな。幹部クラスならこうも簡単に情報
を吐かないだろうし、もっと強い。「この組織のトップも本国ラ
ンクだとA A Aクラスはあつた筈だ。幹部クラスは最低でもAクラ
ス。しかしこいつらは巣廻目に見積もつてもじが精一杯とい
う。

「お、俺達はある実験の為にここに来たんだ」

「実験？ 内容は？」

「内容までは知らない。俺は下つ端の陽動要因だからな」

嘘は……ついてなさそうだな。

「他に知つている情報は？」

「……ない。今回の作戦は説明が殆どされなかつたからな。された
のは陽動の場所とかそれくらいだ」

「これ以上は進展はなさそうか。
それでもとんだ面倒事に巻き込まれたな。」

けど、実験か。何の実験なのか……

まあ間違いなく断言出来ることは、その実験が平和とかそういう目的の為のものじゃないっていつところか。

「それで……、俺は生かしておいてもらえるのか……？」

「……いいだろ？ ただし今日の記憶を失った形でな

「え？」

俺は男の額に手を当て、記憶消去の魔法を発動する。

発動した瞬間に男は気絶し、そのまま次の術式を構築。男の周りに水が出現し、男をその中へと引き込む。これも”水のゲート”的応用である。そのまま男を麻帆良の外へと転送させ、どこか適当な場所へと放りだす。

記憶も消去しているし、俺がやつたとこはバレないだろ？

俺は立ちあがり辺りを見渡す。

結界の解析も面倒なので、今回の諸悪の根源を探す方へと転換。集中し、この結界内で戦闘、または魔法行使が行われている場所を探しだす。

「発見

」

俺はすぐにその場所を幾つか発見する。

このまますぐにその場所へと向かっても構わないのだが、如何せん姿がバレるのは面倒だ。

俺は宙に出現させた水の中へと手を入れ、そこから一つの装束を取りだした。

その姿を見て苦笑を一つ。

まさかまたこの装束を着ることになるとは思つてもいなかつた。

瞬時にその装束と今着てている服を取りかえる。

そこには闇のよつよつした「ポート」に身を包み、顔全体も黒いフードで隠した俺が存在した。

「さて……」

準備も万端になつたところで俺も行動を開始させた。
にしても本当に最近の運の悪さが凄いな……

やはり面倒事といつのは嫌いだ。

折角の平和を満喫しようとしているのに、何故俺のところに転がり込んでくる？ んなもんは英雄とかその辺のところに転がり込めよ。

なんなら帝国の方でもいいから……、とりあえず俺にだけはやつてくれるな。

こう愚痴つてしまつても仕方ないと思う。

魔力の反応があつた場所に赴いてみると、そこでは絶賛戦闘中。
それもこの学園の関係者。

一人は西のお嬢様をストーカーしている百合娘で、もう一人は明らかに中学生には見えない、年齢偽装120%のガンナー。
確か名前は桜咲刹那と龍宮真名とか言つたつけな。一応この学園の裏の関係者の情報は粗方調べている。

にしてもえらべンチな状況だな。

どつちもボロボロで下着とか見えてんじゃねえか。あ、でもガンナーは俺の好みじゃねえなあ。剣士も剣士で容姿は好みだが発育が……あ、涙が出てきそつ。あれで同年代とか。御愁傷様です。
と、こんなことしてる場合じゃなかつたな。てか、これだと俺が

明らかに変質者の烙印が押されてしまつ。

けど、どうやって助けるか。

そもそも助ける必要があるのか。

今でもそれなりにピンチだが、絶体絶命とまでは行つてない。
大方疲労の蓄積だらう。

しかし、どこからあれだけの鬼を召喚してゐんだ？ 幹部クラス
がやつてるのか？ それにしてもそんな反応は全くしない。なら

がやつてるのか？ それにしてもそんな反応は全くしない。なら

そう考えていたが、それは一度中断される。

眼の前で起きていた戦闘だが、変化が見られた。

桜咲が足を滑らせる。それは疲労からくるミスなのだろうが、こ
こでは致命的だ。そこに迫りくる凶撃。

ここで何もしないつていうのも一つの手だろうが、眼の前でそん
な光景を見せられると些か気分が悪い……か。

「 果てる」

故に俺は”ゲート”を使用し、桜咲の眼の前まで一瞬で移動し、
群がつてゐる鬼どもを一振りで全て屠る。

その光景に後ろの一人は驚くが気にしない。

こつちは善意で助けてやつたんだ。それをとやかく言われる筋合
いはない。

「 お、お前は……？」

そんな言葉を投げかけられる。が、

「 下がつていろ。足手まといだ」

「 なつ！？」

そんな光景を尻目に、今なお溢れ出る鬼を還して行く。

「どうやら」の召喚にはそれなりの設定というものがあるらしい。
第一に、同時出現の多さが最大20体ということ。第一に、現界している鬼が10体を切ると、自動で最大数まで補充されること。
辺りを探つてみるが、これを操つている術者は見当たらない。
とりあえずそのことがわかつたので、対策を練る。

同時出現が20を超えないということ、10を切らなければ補充されないというなのなら、無暗に相手を屠るのではなく捕縛するのが効果的だ。

すぐに俺は捕縛魔法で現界している鬼を捕まえ、行動不能へ追いやる。

「とりあえずはこれで一安心か。

そう思い、後ろにいる一人の方へと顔を向ける。

そんな二人の表情は戸惑いと警戒を浮かべていた。

「貴様……、何者だ？」

さつきはお前だったのに、今では貴様にランクアップ！ しかもその問いはこの間嫌という程されたから却下する。

「答える義理はない」

そう答え、俺は一つの魔法を一人行使する。

仄かな光を持つた水が一人を包む。それに一人は慌てるが、別に害を及ぼそうとしている訳ではない。

「傷が……治つた？」

「治癒の魔法……、それも中々高位の魔法を無詠唱か」

戸惑いと感嘆の表情を浮かべる一人を見て、俺はもう大丈夫そう
だと思った。

後はこの結界を作つている原因を取り除くだけだ。

早く帰つてご飯が食いたい。後、溜まつていてる宿題も終わらさなくては。何でこんなタイミングで宿題が大量に出されるのか。問題は簡単なのが量が多い。その為、時間が非常に掛かる。本来ならこんなことをしている暇はこちとら存在しないのだ。

若干イラつきながらも原因を探つていく。

しかし、桜咲の方は空気が読めないのか、俺に質問を浴びせてくる。

「あなたは一体……」

「答える義理はないと言つただろう? どうせもう出来つ」ともないんだ。後、この結界を解析しているから黙つてくれれるか?」「う……、すみません」

あ~、ここまで凹ませる気はなかつたんだけじなあ。
何て言つたか、ゴメン。

4・暗躍（前書き）

この作品は原作「ネギま！？」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

「……ほう？」「どうかしたんですか？」

「イツはまた面倒な仕掛けを施してやがるじゃねえか。

俺は数分の解析の結果を纏めに入る。

まず、こちらに来る前にも言った通り、この麻帆良には龍脈が通つていて。その上に靈樹があり、それを守護するかのようにこの麻帆良学園は存在する。

そして、その龍脈の通り道を調べてみると、どうやらこの場所の真下にはドンピシャで龍脈が通つていて。

次に先ほどまでの鬼の召喚についてだが、どうやらこの龍脈を利

用しているらしい。

まさか俺も龍脈を使用しているとは思つてもなかつたけど。

「なるほどな。これなら術式さえ置いておけば、後は自動でポンプが水汲みをしてくれるのと同じだ」

「はあ……」

「だが、ただの人間がどうして龍脈を操れる？ いや、あいつらは実験と言つていたか？」

「あ、あの～……」

まさかこれが実験の内容か？

にしてもそれがもし本当だと、結構大事だな。術式を解析してみたが、俺でもすぐには理解出来ない代物。数日の猶予があれば問題はないかもしれないが、今は一刻の猶予も争う。

召喚に関しては術式を破壊すれば問題ないだろうが、結界に関し

てはそもそもいかない。

「……とか、魔道具の場所を確認出来ない。大方、鬼の大量召喚のせいで魔力密度が濃くなり、魔道具の魔力素が紛れてしまっているのだろう。

といつことは、手当たりしだいに探し出す他ないといつ訳だ。

面倒過ぎる……

「……お前達、誰かがこの近くで魔道具を発動しているところを田撃していいのか？」

「魔道具…………ですか？」

「ああ。この結界を作りだしている高位魔道具だ」

「私は見てませんね……、龍宮、お前は？」

「私もN.Oだ。しかしそくこんな短時間でそこまで調べ物が出来るな」

感心した表情を向けてくる龍宮だが、俺は大したことはないと素つ気なく返す。

「気にするな……。だが、これでは少し困る。俺もあまり時間は浪費したくないからな」

召喚の術式は既に破壊完了。

ならば他の戦闘区域を当たってみるか？ いや、今の俺は部外者どこのか完全に怪しい人物だ。こうやって一人と会話出来るのも窮地を救つたからであつて、普通の状態で出会えば真っ先に斬られてもおかしくはない。 ならどうするか。

戦闘区域を周るだけ周つて魔道具を探す。これが今のところ一番

の候補か。

だが、この結界はこの広大な麻帆良学園の三分の一は覆っている。俺が阻まれた場所らがギリギリの距離であって、且測的に世界樹すら覆っている。

というか、意識して結界内を解析してみると、どうやら他の場所でもここで使われている術式が設置されている。

数で言えば五つ。ここを呑わせれば六つか。

何の因果かは知らないが、全てを一網ぎで呑わせてみると、それらはある一つの形を作る。

「籠目……いや、西洋が扱っているから六芒星か」

全く面倒臭い。

これも術式に意味が加えられてやがる。

六芒星は魔法陣においてよく多用される布陣だが、本来それが意味することは安定、または調和を意味する。

詳しく述べてないので間違っているかもしれないが、本来、召喚の為の術式は単独では使用出来ないのだろう。しかし、ここで六芒星が登場すると話は変わる。それぞれの術式を六芒星になるように設置することにより、単独では安定に発動しない術式を極めて安定に発動させることが出来るようになる。

しかも、これらの術式の発動に伴い、結界の強化も付加されていやがる。

さつき面倒になつたので、力技でこの結界を破りつつとしても無理だった。どうやら結界の魔道具は六つに分けられ、召喚の術式と一緒に緒くたにされているのだろう。実際、先ほどこの術式を壊した時に結界に乱れが見られた。一つ潰せばどうにかなるかと思ったが、どうやら全てを壊す必要がある。

六芒星の助けを得て発動している術式なので六芒星の一片でも潰せばじつにかなると思っていたが、簡単にはいかないようだ。

「さて……」

ならば早い話、全ての術式を叩き壊せばいいといつだけ。

「えつと……？」

「俺はこの面倒な術式を破壊してくる。お前達はどこの部隊とも合流しておけ。ダメージは俺が回復させたが体力などの疲労まではそういうかない」

「ですが……」

「それにお前達だと足手まといだ」

「……刹那、ここはこの人の言うことを聞いておいつ。幸い、この人は私達と敵対する意思はなさそうだしな」

「だが、龍宮」

「それに足手まといなのは本当のことだりつ。常時なら兎も角、今の状態では何も出来ないよ」

「……わかつた」

どうやら話し合には終わったようだ。

話し合いで聞く限り、俺が言ったことを納得してもらえたようだ。これで心置きなく移動出来る。これでも女の子には優しいのよ？ 敵対するなら別だが。

さて、ならば早速移動するか。

「これから一番近いところは……北西に800メートルと書つといふ。」

地理的には”ゲート”で移動すれば全く以て問題はない。

「ではな

俺はそう言い残し、”ゲート”へ身を潜らせその場から姿を消した。

「行つた……か」

「ああ」

先ほどまでこの場にいた黒の存在。

初めは敵かと思っていたが、どうやらそのようではなかつた。私の危機を救つてくれた恩人。ただその手を一振りするだけで、私達が苦労して倒していくたるどもを屠る力、一目見るだけで術式諸々を見破る知能。

どれもこれもが凄く、また私が到達していない場所に到達していた。

確かにその格好は怪しさを呼ぶものだつたが、どうしてかそのような気分にはなれなかつた。

いや、その理由もわかっている。大方、私自身が彼によつて助けられたから。これは龍宮も同じだろう。

先ほど聞いたが、龍宮が持つ”魔眼”ですらその正体を見破れなかつたとか。

だが、ここで一番問題になつてくるのは、この麻帆良学園にそれほどの使い手がいたかということだ。

私も去年からこの麻帆良学園に通いだし、裏の仕事を龍宮などと共にこなしてきたが、今日出会つた存在ほどの使い手とは出会つたことがなかつた。

あの強さは”英雄”とまで呼ばれているタカミチ先生を凌ぐほどだろ。これは龍宮も同じ見解らしい。あれほど使い手は”あちらの世界”でもあまり見られないとか。

ランクに表すと最低でもAAAランク。下手すれば世界最強クラスだと龍宮は言っていた。

世界最強クラス……、それは私が目指す一つの到達点。
お嬢様のお父上、つまり長が居座るその極地に私も到達し得ねばならない。そうでなければ……守れない。

今日みたいな無様な姿を晒してしまつて足搔いても私ではお嬢様を守りきることなど不可能。

「強く……なりたいな」

そういうえば長が常々言っていた言葉があった。

”強くなることは構わない。しかし、強くなつて何をしたいかを良く考えなさい。そうしなければ君が持つ力はただの破壊の力でしなく、多くの悲しみを生むだろから”

何がしたいか……

そんなこと、私には一つしかない。

お嬢様をこの手で守つること。あの笑みを絶やさないこと、それが私が成し得たい夢。

「（そう思つていても当の本人は悲しみに溺れていることを気付いているのか？ やつぱり護衛といつのは難しいね。私は今のような傭兵が一番合つてる）」

「どうかしたのか、龍宮？」

「いや、何でもないよ」

「そうか、いや本当に申し訳なかつたの。今日は特別報酬を出すとしよう」
「ふんっ……。それで、じじい。原因は何か掴んだのか？」

眼の前に座る地球外生命体　近衛近右衛門に私は少し苛立ちな
がら問いかけた。

今日起こつた侵入者の事件。それはどう考へても普通のものでは
なかつた。

いくら倒しても溢れ出る鬼達。強固な結界。その一つがとても氣
掛かりであり、そしてそれらはふとした瞬間に消え失せた。

そこに居合わせた当事者共に話を聞くと、戦つている最中に急に
消えたということしかわからず、それらの原因は不明。

タカミチでさえもわからず、ただ今まで感じなかつた気配を一つ
感じたということくらいしかわからなかつたらしい。

一つの気配？

「そう言えば刹那ちゃんから面白い話を一つ聞いたの
「面白い話？」

その内容を聞いてみると、面白いといつよりも不思議という気持
ちの方が強かつた。

一人の危機に突如現れた謎の黒い存在。それはただ一振りで敵を
屠り、また結界と召喚の術式の謎を解明し、それをどうにかするた
めにまた姿を消したとのこと。

多分だが、これがタカミチが感じた気配のことだろう。

「その存在は”ゲート”の魔法で現れ、また”ゲート”の魔法で姿
を消したらしい。しかしおかしいのう、この学園にはそれほどの使

い手などいなかつたはずなんじやが

”ゲート”？

不思議と私は一人の存在を思い出した。

数日前に出会つた一人の少年。

私と相対してもなお対等に渡り合い、そして”ゲート”の魔法で姿を消した不思議な存在。

無詠唱で高度な結界を張るその技術には久しぶりに目を見張つた。

じじいの話を聞けば聞くほど、それらの情報とあいつが重なりあう。

十中八九、その黒い存在とはあいつ 海原畠のことだろひ。

ならばそれをじじいに伝えるか？

「（いや、止めておひ。あいつは私のことは何一つ告げなかつた、ここで私がそうしてしまえば奴に不純を働いたのと同義。ただでさえあいつには借りがあるのだ）」

それにあいつの眼に宿つた悲しみは本物だった。
裏の世界と関わりたくない、そうあいつの瞳は訴えていた。
それに伝えたところで私に何の利もない。それどころか損をする可能性すらある。

Hi gic l i s k L o w r e t u r n。私に生じえる畠み
が少なすぎる。

ひひでこの札を切るのはただの悪手だ。

「（私も甘くなつたか？）」

窓から外を覗く。

そこには綺麗な星空が辺りを照らし、希望という象徴を見出していく

いた。

私はそれを一笑に伏し、一つのことを考へていた。

「どうやってあいつを持って成すか。

あまり事を広げるとじじいに見つかる可能性がある。それはあいつも嫌だうし私も嫌だ。

ならば家に招待するか？

家なら兎も角”別荘”ならばじじいに見つかることもなくあいつを持って成すことが出来る。

「…………それにあいつが持つ実力も見極めることも出来るしな」

「何か言つたかの？」

「何も。そこまで羈縛したか？」

今からでも楽しみなのが自身でも理解出来る。

「（じーーー年ほどは楽しむといつ）とを放棄していた節がある。

「（さあ、あいつをどうやって”持て成すか”……。考えるだけでも楽しいな）」

5・祭りの開幕（前書き）

この作品は原作「ネギま！？」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

5・祭りの開幕

あれから俺は全ての召喚の術式が配置されていた五つの場所を巡つた。

どの場所でも召喚されてくる鬼と熾烈な戦いが繰り広げられていたが、生憎と俺には関係なかった。俺は闇夜に紛れる暗殺者のように姿を現さず、そこに居合わせる人間にバレないよう術式を破壊していく。

術式を破壊すれば召喚も收まるのは当然の帰結であるが、その理由を知るのは俺のみで、そこで戦つていた魔法教員などは首を傾げていた。

しかし、彼らの目的はそれを解明することではなく、ただこの学園に住まう人々をすることのみ。故に疑問を隅に置き、他の場所へと巡つていく。

その中でやはり”英雄”と呼ばれる存在だけは少し違つたようだ。俺が気配を出来るだけ悟らせないよう術式を破壊し巡つていたが、デスマガネことタカミチ・T・高畠だけは俺という存在をごく僅かだけではあるが感じとつていた。

俺がその場所に姿を現し、術式を破壊しようとした瞬間、彼は俺がいる方向に顔を向けていた。確かに偶々だと言つとも出来るが、俺にはどうしてもそうは思えなかつた。

確実にナニカがあると確信していたあの眼光。平和な世界では絶対に見ることは敵わない意思を持つ瞳。それが俺を捉えていた。

幸いなことに存在だけ感知され、俺ということまではわからなかつたよう。それに彼もまた”英雄”である前にこの学園に住まう人を守る”教職者”で、それらの疑問よりも守ることを選んだ。

最終的に俺は全ての術式を破壊することを完了し、それと同時に

辺りを覆っていた結界は壊れた。

壊れた瞬間に現実というものに辺りは侵食されていく。それを見

届けた後、俺はすぐに”ゲート”を開き、自分の家へと戻った。

纏ついていた装束を脱ぎ捨て、ボスンと音を立ててソファーに腰を掛ける。

考えることは一つ。

それは今日の出来事。

どうして彼ら”久遠の廻廊”はこの学園にやつて来たのだろうか。

いや、それは大体ではあるが予測が付いている。

多分ではあるが、彼らはあの男が言つていたように実験をしに来たのだろう。

内容は簡略に表すならば”龍脈の操作”。

ヒトという存在では到底操ることなど不可能なそれを操る為の実験。

しかし疑問が出てくる。

何故彼らは態々このような場所で実験を施したのか。

確かに龍脈が通っている場所などは限られてくる。日本で言えばこの麻帆良学園にも”京の都”や”富士の樹海”なども存在するし、マイナーで人が殆ど訪れない”阿蘇”や”白山”なども存在する。それなのに何故態々人が集まっている麻帆良なのか。

この場所は現在、日本で五指に入るほど警備が堅い。他には関西呪術協会なども上げられるが、それでも堅いことには変わらない。それに”英雄”とまで称される人物も教員をしているのに、何故このような危険を冒してまでこの地で実験を施したのか。

それらの情報を知り得なかつた？

在り得ない。仮にも大組織とまで称される彼らがこんな情報をすら

集められないとは思えない。

ならば何故？ それほどの危険を冒してまで得たかったモノがあるのか？

それともこれも序の口で本来は別の目的でこの地にやって来たのか？

「面倒くさつ…」

本当に面倒臭い。

俺の予感が外れなければ、また”久遠の廻廊”はこの地にやって来るだろつ。

今回の実験と称されたそれすらも上回る大惨事を引き連れて。

「絶対俺つて巻き込まれるよなあ……」

最近本気で運がないし……

「まあ、俺に迷惑が掛からなければそれでいいけどな」

階段を昇り一階の自室へと引き込む。

溜息を一つだけ吐いて、空気を変えた。

「俺に迷惑が掛かるのなら

「

空気が変わる。

それと同時に辺りの重力が変質したのではないかと思つほどに重くなつた。

それに伴い鳴り響く音。ギチギチと、まるでナニカがひび割れるかのよつこ。

「 どんな存在であらう消し去るのみ」

バタンと扉は閉じられた。

その先に存在したモノは地獄か、それとも

「 いけねつ。少し気が昂り過ぎたか。久しぶりだつたからなあ、人を殺したのは。あんまりこの状態にはなりたくないわ、やつぱり」

時は流れ、あの面倒臭い事件から一か月が過ぎ、今では俺の学年も一つ上がった。

あれ以来目立つた事件などはなく、俺が懸念していたことも起ることもなく、記憶から消え去つたかのように静かになつた。

俺自身も面倒事に巻き込まれることなどはなくなり、あれ以来エヴァンジェリンとは邂逅していない。

ただ一つ気掛かりなのが、この学園に”サウザンドマスター”の息子らしき人物が赴任してきたことについてだ。

一応調べてはみたところ、噂は本当らしい。

家名にはスプリングフィールドとの文字が確かに刻み込まれ、その面影に”サウザンドマスター”の影がある。

だが、そこで疑問になつてくるのが、あの”サウザンドマスター”は誰と結婚し子供を成したのかということ。

あの男はファンクラブなども形成され、女など選び放題だらうが大戦時にはそのような噂は露ほどにもなかつた。もしここに”千の刃”がいれば尋ねるのだが生憎とあいつは魔法世界で隠居生活を送つていて。デスマガネならば知つてはいるかもしねりが、俺は全くと言つていいほど関わり合いがない。それにどうしても知りたいといふほどでもない。

しかし何故ここに来るのか。

予想はつづが、それは本当にしてもよいことなのだろうか。

「魔法学校の最終課題だろうな、どうせ……」

しかし、まあ面倒な課題を引いたものだ。

流石は血筋とも言うべきか。

一応一目だけでも見ておこうと件の人物を遠目から窺つたが、中々どうして。

親譲りと言えるほど中々強大な魔力を内包していた。それでも近衛の娘や俺には劣るが。

「少し甘ちゃんなイメージがしてたが大丈夫なんだろうかね。バレてないとはいえ秘匿である魔法をぶつ放してたけど」

あれを叩撃した時は本当に肝が冷えた。

だつてあれだぜ？ クシヤミで女生徒のスカート捲り上げるのはどう考えても犯罪だろ？ 僕にとつては御褒美だつたが。

あれでも上の方は放置とか。大丈夫なのかね、この学園は。

「ま、俺には関係ないからいいけどな」

俺は手に持つ蠅燭を見つめる。

今日は年に一回ある学園のメンテナンスがある日だ。

電気製品は全て使えないのでこうして蠅燭を買い込んでいくという訳。

「さて家に帰りますかね」

にしても、どうしてか嫌な予感が拭えない。

「ああ、そうだと思つてましたよつ！ 今日この日は学園の結界が弱まるつことは、それだけ外部からの侵入が容易いつてことを！ ああもう面倒臭いなつ！」

俺は黒の装束を身に纏い、闇夜の中を疾走する。
これが俺がずっと考えていた嫌な予感の原因か。すっかりと失念していた。

この学園の結界は魔術的要素と科学的要素の一重結界となつているのだが、この時 学園のメンテナンスの時だけはその科学的要素の結界が崩れ去る。それもその筈、その科学的要素の結界を発動する為の媒体となるものは電力。しかし、メンテナンス時には一時的にその電力を切つてしまつ。これによつて結界の方も同じように崩れてしまうというわけだ。

だが、一応魔術的要素の結界は残つてゐる。が、この学園の結界の比重が2：8で科学的要素の方に傾いている。つまり、今この時だけは普段の2割ほどの堅さしかないということ。

何でこの学園はそれほど片方に傾いてるんだよ。

確かに電力とか科学の方が力を得ることが容易だらうからな。それに比べて魔力は集まりにくい。

この学園は龍脈も靈樹も存在するが、この間にも言つた通りそれらはヒトという存在では到底操りきることなど不可能に近い。莫大な力を操ろうとし、そしてその先あるものは 滅亡。
それが真理なのだ。

「ああ、本当に面倒だなッ！」

だが、昔とある人物が言っていた言葉が頭の中で繰り返される。

”理とは壊されるものでしかない。故に私は壊すのだよ”

「悪いが俺の平穏は壊させねえよ 」

本当なら全てを学園に任せ、俺自身は家でゆっくりしておきたいところだが、それでは無理だろ？

先ほどから感じる魔力。間違いなく強者と呼ばれる人物がこの学園内に侵入している。

正直な話、学園の戦力ではこれらを駆逐するのはほぼ不可能に近い。侵入者のトップが下手すればデスマガネと同格かそれ以上。確かに彼は”英雄”とまで称される人物だが、戦力的に言えば正直あと一歩足りない。

「ああ、関わりたくない。でも関わらないと平穏が……ッ！」

葛藤する心が俺を苛む。

ああ、何でこんなことになつてるの？ ねえ、俺が悪いの？ てかこんなことになるんだつたらエヴァンジエリンの封印を俺が解いた方がよかつたんじゃね？ そうしたらこの騒動も彼女一人で収められたかもしねりないし……

ブツブツと呟きながらこの闇夜を疾走する黒い影は傍から見れば怪しいことこの上ないだろ？

しかし、今現在の場に姿のある者など俺以外いない。と、そう高を括つていた時期が俺にもありました。

「……何で裸？ てか何？ これ襲つてもいいの？」

眼の前に横たわる少女が数人。それにどれもが何故か素っ裸という現状。

正直意味がわからん。

「つて、また犯罪者チックな行動してるじゃん、俺……」

もう少し見ていたい気もするが、今はそれほど余裕があるわけでもない。

彼女達の勇姿は俺の心のフォルダ（100万画素。保存量は無限大）に収め、この場から離れる。

そう言えば、先ほどから感じられる幻想種の魔力。もしかしてエヴァンジエリンの封印が解けたのか？ いや、解けたにしてもこれじゃ少なすぎる。大方封印が一時的に弱まつたってところか？ この時期に弱まつたってことは学園を覆つている結界が封印に関係していたのか。

「これじゃ任せるのはちとキツいが……」

溜息を一つ吐き、元々の目的を果たすことにする。

「これで最後だッ！ 来るがいい、坊やッ！」

幼き闇の王と英雄の息子が対峙する。片や闇纏う吹雪を手にし、片や雷纏う暴風を手にして。

“闇の吹雪”！
“雷の暴風”！

両者の魔法が両者の間で爆発する。

互いが互いを押し闘ぎ合つ。

しかし、600年の月日は伊達ではない。たつた10にも満たない歳月しか歩んでいない英雄の息子では、到達し得ない極みという場所へ辿り着いている闇の王に勝利することは難しい。いくら才能があろうと、それは時として努力や歳月に膝を屈することもあり、それが今だつた。

しかし、彼は負けなかつた。

確かに彼は英雄ではない。だが、彼には確かに英雄の血を引いていた。

英雄とは人が作り出した”願望”の結晶。

それは決して負けることなく、ただ絶対に勝利を得る幻想の塊。それを確かに少年は受け継いでいたのだ。

「ハックシュンッ！」

彼が起こしたものは魔力の暴発。

本来ならば行き場を失つた魔力が辺りに撒き散らされるのだが、今回だけはそれが功を奏す。

指向性を伴つた魔力のそれは、未だ闘ぎ合つ魔術の間へと押し入つていく。劣勢だった少年の魔力はそれによつて形勢が逆転された。

「な、何ッ！？」

形成はひつくり返り、そのまま闇の王の魔力は破れ、少年の魔力

の奔流が襲う。

荒れ狂う魔法は闇の王を飲み込み、そのまま天へと昇る。それに
よつて蹴散らされた雲と、そのおかげで現れた夜空を見れば、先ほ
どの魔法がどれだけの威力を持っていたのかを窺えた。

普通の人間ならば死んでいてもおかしくはない。

しかし　彼女は”不死の王”でもあった。

「……やりあつたな、小僧。流石は奴の息子だ」

姿を現した彼女は、衣服が全て消し飛ばされ全裸。大事な部分だけを手で隠し、それ以外は夜風の下に晒される。

正史ならば、この後にメンテナンスが予定より早く済み、彼女を縛る封印が復活してしまつ。

だが、これはその正史から外れた”外史”なのだ。

限りなく本物に近い偽物。しかし、そこに存在しているヒト達は確かに生きている。

これを偽物と糾弾することは誰にとつても不可能だらう。

クルクルと廻る歯車は本来の動きを成さず、別の動きへと変化した。

それが良いことなのか悪いことなのかは誰にも理解出来ず、また決めることも出来ない事柄だ。

故に、結局の結論はこうなるのだ。

意味など求めても不要。ただ感じるのみ、と。

「まさかまさか……、こんなところに”闇の福音”が存在しているとは。研究材料が増えましたよ」

真祖と英雄の息子の間に突如現れた初老の男性。

その男はまるで社交界などに出掛けるようなスーツで身を包み、今パーティーから帰つて来ましたというような雰囲気を醸し出す。しかし、それと同時に滲みだす殺氣と魔力。それは存在するだけで相手を威圧する。現に英雄の息子は恐怖し、彼の従者である少女もまた顔を青くした。

唯一闇の王とその従者だけは臆することなく、ただ眼前の敵であろう存在を睨みつける。

だが、その眼光すら男は受け流し、相手をイラつかせる態度を止めやしない。

それが意味することは圧倒的”自信”。

絶対的に相手を打ち負かせるという確信がその男の中には存在した。

「貴様……、何者だ？」

故に真祖はそう問いかけた。

返答しだいでは只では置かないという視線を込めて。

しかし、彼はそれすらも一笑に伏す。

「私ですか？ 私はただの犯罪者ですよ、貴方と同じでね

「……坊や、一旦休戦だ」

「え……？」

「コイツは性質の悪い”悪の魔法使い”らしいからな。茶々丸、前

衛を頼むぞ

「畏まりました」

戦況は一気に変わる。
真祖 vs 英雄の息子だったのが、今では真祖&従者 vs 侵入者へ
と。

状況は一気に変わる。

荒れ狂う魔法とその中を疾走する三つの影。
動く者と動かない者。戦う者と戦わない者。殺そうとする者と打
ち払おうとする者と怯える者と。

そしてまた、この場へと近づく一つの影も存在した。

6・祭りの激闘（前書き）

この作品は原作「ネギま！？」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

6・祭りの激闘

「チツ！ 茶々丸ツ！」

開始数分で、我が従者である茶々丸が撃墜された。

糞ツ！ 何故これほどの使い手が侵入しているといつのだツ！

警備の連中は何をしているツ！？

内心でそう叫ぶが、それをずっと続けていられるほど余裕は私にも存在しない。

確かに今現在、私の封印は解けているが、それでも全盛期の三割、良くて四割というほどでしかない。

これ位あれば坊やには十分だったのだが、眼の前の敵には全然足りない。

眼の前の存在はどう見積もっても本国ランクAA以上。AAAと言つても何ら差し支えない実力を持ち合わせている。

しかしどうする？

このままではジリ貧でこちらが負けることは明白。しかも前衛をこなす従者は既に脱落。後ろには坊やと神楽坂……か。

チャチャゼロがいればどうにかなつたかもしぬいが、それは後の祭りだ。

今はこの状況をどうやって切り抜けるか、それが問題だ。

負けでも いや、既に勝敗は決している。故にどう“うまく負ける”かが問題なのだ。

下手すれば私や坊や達はあの男に捉えられ、実験の道具にされるだろう。

あの瞳には覚えがある。どれだけ倫理的に間違つてこよつと、自

分の欲求を満たす為ならばどれだけの犠牲を払おうと成し遂げようとする、そんな瞳だ。

昔に良くあんな瞳を持つた連中に追いかけられた。だが、これほど使い手に挑まるるのは初めてだ。

「ほらほらどうしました？」

「ほぞけッ！　”氷神の戦鎧”！」

男に迫る巨大な氷塊。

しかし、それすらも男はそれを飲み込むかのような紅蓮の炎で溶かしつくす。その炎は溶かすだけでは留まらず、そのまま私を飲み込むかのように進軍していく。

舌打ち一つ零し、回避を選択。

全盛期ならば露知らず、今の状態ではあれを防ぐことは不可能に近い。詠唱すればどうにかなるかもしれないが、前衛のいない私はそのような余裕は持ち得ない。

だが、避けた方向には男が　　ツ！

「プロミネンス
”紅龍”」

「ぐうつ！？」

龍を模した炎により私の身体は焼かれる。

どうやらあの男は無詠唱の魔法が得意らしい。先ほど使った魔法も中の上に位置する魔法だ。それすらも男は無詠唱で発動してくる。正直、完全に不利だ。

「流石は”闇の福音”。私の魔法でその身を焼かれようとも健在ですか」

「フツ、お前達のような劣等種とは訳が違うからな」

「その劣等種に負かされる気分はどうでしょうかねえ？」

チツ、安い挑発も無意味……か。

チラッと後ろを振り返る。そこには未だ震え続ける馬鹿が一人。

それがいけなかつた。その一瞬でさえ男にとつては隙になる。

刹那の間で男は私との距離を詰め、そのまま首を握りしめられる。

「グゥッ……、き、貴様……ツ！」

「どうやら甘くなつたようですね”闇の福音”。昔の貴方ならこんな隙は見せなかつたろうに」

失望したかのような瞳で私は見詰められる。

弱くなつた……か。

それもそうだろうな。魔力は封印され、こんな場所に15年もの間閉じ込められていたんだ。

だが

「これでも意地があるのでな……ツ！」

最後の魔力を振り絞り、坊やと神楽坂を転移の魔法でこの場から離れさせる。

「自分より他人……ですか。やはり貴方は弱くなつた」

ああ弱くなつたさ。

だがそれでも私にも意地がある。

15年もの間放つておかれたが、それでも私はあいつと約束したんだ。

この手がどれだけの血で汚れようと、あいつは言った。

”光で生きてみる”

「では、これにて終幕です」

「いや、それはまだ早いな」

そうして私の瞳に映つたのは、あいつと似て非なる姿をした一人の少年。

しかし、どこかあいつと被つて見えた。

魔力の残滓を追跡し、その場で見たものは首を掴まれているエヴァンジエリンと掴んでいる初老の男だった。

俺は瞬時に判断を下し、一人の下へ駆けつけ、掴んでいる手を放させる。身の危険を感じた男はすぐにその場から引き離れ、こちらを警戒する。

離れた瞬間に状況の判断を再確認する。

横には少し封印が解けたエヴァンジエリンが、下に目を向けると煙を上げている茶々丸が地に伏せていた。そして眼の先には殺気を迸る男。

「大丈夫か？」

「あ、ああ。……お前、昌か？」

「……ああ。他言無用で頼む」

どうせこれでバレなかつても茶々丸にバレる つて、よくよく考えたら今現在は茶々丸はダウンしているから俺の姿を見てなくね？ 見てなかつたら変装がバレることもなかつたんじや……

はあ、もういいや。

この怒りはあいつにぶつけるとしよう。

「なら下がつておけ。あいつは俺がやる」

「だが……」

「全盛期なら問題ないかもしれないが、今のお前じゃあいつと戦うのは無理だろ？ それに茶々丸の心配もしてやれ」

「……わかった」

俺の言葉に納得がいったのか、エヴァンジエリンはすぐに茶々丸の下へと向かう。

遠目から見ても大破とまではいかず、一いつ中破とくらいうので、復元には問題ないだろ？

その様子を見ながらも、意識は男から離さない。このレベルの存在になると、先ほどのエヴァンジエリンと同じようにな一瞬の隙が生死を分け隔てる。

「さて、貴方はどちら様でしよう？ 私が知る限りでは貴方ほどの使い手はこの学園には存在しなかつた筈では？」

初老の男性は笑みを浮かべながらこちらに問いかける。

しかし、その笑みに宿るモノは狂氣。友愛などという優しいものではなく、相手を痛めつけることを快樂にしている、そんな笑みだ。だが、俺はそんな質問に答えることもなく自分が思ったことを口に出す。

「犯罪組織”久遠の廻廊”の現首領。”殺人科学者”レイフォオス・ガルグリオス、か。確か本国のランクに直せばA A AからA A A +の実力者ではあるが、それ以上にお前の扱う禁呪を恐れて本国の老害共はお前の危険度はS Aに設定していた筈だな」

俺の言葉に少しではあるがピクッと反応する。

それは刹那の間ではあつたが、俺は見逃さない。間違いなく俺の眼の前にいる存在は大組織のリーダー。

全く、本当に厄介な相手がやつて来たものだ。

「……本当に貴様は何者だ？」

「口調が崩れているぞ」殺人科学者^{フロエッサー}？

「……本当に貴様は何者だ？」

挑発には……乗つて来ない、か。

だが、それも少しの間だけだろう。

この空氣でわかる。眼の前の男は今に俺を殺しに掛かろうとするだろうと。

「この一年味わう」ことがなかつた空氣が俺を包み、肌を刺すような殺氣が俺を威嚇する。

それに思わず俺は笑みを浮かべた。

「ほら、俺を殺したんだろう？ ならさつさとかかつて来い。俺はただでさえお前達のせいで機嫌が悪いんだ。お前達みたいな害虫は駆除しないと俺の平穏な生活が送れないからな」

辺りに渦巻く空氣の質が変化する。

ガルグリオスから漏れだすものは多大なる殺意、俺から漏れだすものはそれを凌駕する狂氣。

暴れ狂う昔の”俺”を必死になつて抑え込む

普段自分を抑え込んでいる鎖がギチギチと軋みを上げだす。

「貴様……ツ！」

「さあ来いよ。俺達の間にはもう言葉など必要ないはずだ。必要なことはただ一つ」

世界が輝く。

それは両者が扱う魔法によるもので、空中には大小様々な魔法陣が浮かび上がった。

瞬間、二人の魔法は交錯した。

「相手の全てをこの世から消すという殺意だけでいい

激突した魔法は水と炎。

普通の世界ならば競り勝つのは水ということくらい小学生でもわかることだが、生憎とこれは普通の世界ではなく魔法の世界。そんな常識はいとも簡単に崩れ去る。

二人の中央で拮抗する水と炎。水が炎を消し去るのではなく、また炎が水を蒸発させる訳でもない。本当の意味では二つは拮抗していた。

しかし、俺もガルグリオスもその勝敗を見届けることないまま、次の動作に入っている。

宙に浮かぶ幾何学模様を持つ魔法陣から氷の槍が何条も飛び出して行く。

それを見たガルグリオスは避けられるものは避け、無理なものは叩き落とす、または障壁で防ぎ俺の下まで疾走しようとする。

「甘い」

俺は腕を振るつ。

その瞬間、悪寒を感じたであろうガルグリオスは身を屈めた。すると次の瞬間にはガルグリオスの後ろに存在した木々が真つ二つに

裂ける。

「……水、か。それも不可視になるまで細く、そして鉄すら真つ一つに出来るほどの強靭さを兼ね備えているな?」

初見で見破るガルグリオスはやはり腐つても本国ランクAAAらしい。

普通の魔法使いなら見破るどころか、先ほどの一振りで首が飛んで絶命しているだろう。

「流石だ”殺人科学者”。ちなみに俺はこれを”水糸”と呼んでいる」

「糸……。私はそんな物騒なモノは糸だとは思いたくないなッ！」

幾百幾千もの水の糸を挿い潜りながらガルグリオスは俺の五歩手前まで歩みを進めた。

舌打ち一つ零し、俺はその場から離脱する為に無詠唱で氷群を召喚し、それをぶつける。

しかし、それはガルグリオスも読んでいたのか、同じように無詠唱により相殺。同時に詠唱破棄した中位の古代魔法を放つ。

「プロノネンス
”紅龍”！」

至近距離から放たれる炎竜はすぐさま俺を飲み込もうとする。が、俺はそれを障壁で一時的に防御。それと同時に”ゲート”を開き、ガルグリオスと離れた場所に転移する。

目測にして50メートルと少しとこりから、俺は詠唱を開始する。

「ディエス
D i e s イレ
i r a e , ディエス
d i e s イラ
i l l a ,

ソルウェット セクルム イン ファヴィラ
S o l v e t s a e c l u m i n f a v i l a

どうやら、ガルグリオスは未だ俺が転移した事実に気が付いてないよう。

彼の手から噴き出る炎竜が視界を奪い、確認出来ていない。

「我、盟約に従いこの場で命ずる。

世界が止まつたその日を再現するか如く、蒼槍を掲げよ。

凍土すら生温い、その零度を以て世界を止めよ　”絶対零度の

氷槍”！」

詠唱を完了させ、腕の魔法陣から姿を現す氷槍。

その膨大な魔力を感じとつたガルグリオスは漸くその事実に気が付くが、もう遅い。

こちらを振り向くと同時に俺は氷槍を投擲する。

魔力的にも質量的にも膨大なその槍は、音速を超えるかのようなスピードでガルグリオスを喰らいかかった。

相手が展開出来る思考時間は1秒未満。

しかし、その無茶をガルグリオスはやつてのけた。

あの刹那の時間で回避は不可能と判断した彼は、自分の片腕を生贊として他の部位を守り遂げる。

「片腕に魔力を集め、無理矢理に槍の進路を変更するか……」

夥しい量の血が吹き出し、ガルグリオスは痛みにより顔を顰める。だが、それも一瞬だけですぐさまに魔法で無理矢理吹き飛んだ腕を治療し、失血死を免れる。

やはり一筋縄ではいかないか。

普通の犯罪者でも、それならの上位魔法使いでもあれならばほぼ100%で勝利が決する距離だった。

しかし、それでもガルグリオスは倒れない。

幾千もの戦場を歩み、そこで培つた経験が彼を生かしたのだ。

「やはり経験は伊達ではないということか……」

第一二ラウンドの始まりだ

6・祭日の激闘（後書き）

予定より二日遅れとなり申し訳御座いません。

7・祭りの終幕（前書き）

この作品は原作「ネギま！？」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

7・祭りの終幕

「やつてくれたな……ツー

そのまま先ほどからは考えられない速さで飛翔するガルグリオス。しかし、その方向は俺の方ではなく、真反対。

一瞬茫然とするも、次の行動がどのようなものかを予測出来た俺は対抗策をすぐさまに練る。

「冥界の王、奈落の果て、古の漆黒」

朗々と響く詠唱は間違いなく上位古代呪文。

どのような内容かはわからないが、えてして上位古代呪文というものは広範囲における殲滅が主だ。それを証拠に、教科書などに載る上位古代呪文の一部である”千の雷”や”燃える天空”など、全てが広範囲殲滅呪文となっている。

それに対抗出来ることと言えば、同ランクの魔法をぶつけるか、その魔法を真正面から受け止めるかの一択。

勿論、俺が取る行動は一つしかない。

「滄溟たる波濤よ」

お互いの距離は目測で200メートル前後。

本来ならばこんな大技をこんな至近距離で撃つものではないのだが、今回はそもそも言つていられない。

両者の詠唱はほど同時に完了した。

「魔界の獄炎は全てを滅ぼす。」

現世と幽世の狭間にて、その悪意を以て燃え盛れ　　”狭間の黒炎”！」

「戦渦となりて厄を呑み込め。

海神の名に於いて、執行を命じる　　”ダイタルウェイブ大海嘯”！」

天を焼き焦がすような黒炎がこちらに迫り、それを飲み込むかのように大津波が飛沫を上げる。

一つの力は拮抗するかと思いきや、それらは拮抗することなく互いが互いを貫通し発動者の相手を喰い殺そうと唸りを上げた。

”ゲート”で避けることは……キツい。範囲がどこまでか見極める余裕が存在しないからな。
ならばどうする？

もう一度同系統の魔法を放つて相殺するか？　いや、無理だ。今からでは詠唱する時間は間に合わないし、相殺するだけの魔法は無詠唱で発動することもキツい。

ならばどうする？

障壁で耐えきるか？　いや、無理だ。あれほどの大魔法ならば障壁と衝突した瞬間に粉碎されることが眼に見えている。ただでさえ俺は守よりも攻の方が得意だというのに。

ならばどうする？

「ならば、一点突破で抜けきるのみ　　」

発動する魔法は水の槍。

ランクにすれば下の上と言えば良い方か。そんな初級の魔法だが、それに術式を付すれば話は変わってくる。

「耐魔突破、衝撃、一点集中　　」

この場で有効な術式を全て付与していく。

固く硬く堅く、魔力運用を最大限まで利用し、水の槍は姿を変える。

始まりは人の腕くらいだったのが、今では破城槌のように巨大になり、先ほどの氷槍と同格の風貌とまで成長した。

「突き抜ける　ツ！」

それを投擲した瞬間、俺はその槍の後ろにピッタリくつ付く形で疾走する。

迫り来る炎壁に槍がブチ当たり、その中に減り込んでいき、その中を通り抜けるように俺は進む。

炎の中にいた時間はほんの一秒未満、しかし俺の周りに常時張っている障壁は消え去り、また追加で掛けておいた防御魔法なども全て吹き飛んでいた。

身体にダメージは少なく、戦闘続行になんら問題はない。

それは相手方も同じようで、大量の水を浴びたガルグリオスが先に見えた。

息つく暇もなく、俺達はまた魔法を応酬する。

しかし、ガルグリオスの様子がおかしい。

先ほどの攻撃は全て避け切ったはず。それなのに、何故あれほど血が吹き出ている？　それ以上に極度の痙攣？

「クケキクココカコ！」

瞳に生氣が感じられない……

まさか　ツ！？

「精神掌握魔法だと……ツ！？」

何故このよゐな場所でそんな禁呪に出会わなければならないんだ？
といふより、何故これほどの使い手が禁呪を食らつてゐる？ 普通ならば食らう前に対処出来るだらうし、食らつても解呪することだって可能な筈。それだといふのに……

しかし、そこで俺は一つの仮説を思い付いた。

「まさか”傀儡傀儡の深淵”か……？」

”傀儡傀儡の深淵”。

それは”失われた禁呪”とまで称される魔法の一つであり、その中でも厄介な部類、所謂精神操作の魔法に当たる。これはその中で特に厄介とされており、これの存在の御蔭で本国の老害共も恐れ、こいつを危険度SAランクに引き上げた程の魔法なのだ。

効果は単純であり、また強大。その詳細は精神を操作することは操作するのだが、その操作方法が厄介なのだ。

普通の（と言つても精神操作、掌握の魔法はほぼ全てが禁呪指定になつてゐるので普通とは言えないが）精神操作関連の魔法は、本当に傀儡のように入形のよゐな存在に変え、また単純な命令や行動しか取れない。しかし、この魔法は違ひ、術者がこなしてほしい”行動をインプット”し、それが彼の行動理念のトップに持つてくるようにするということ。それにより普段の行動に特に変化が見られないのと、人形とは成らずに複雑な行動も取れるようになるという一點だ。特に後者の複雑な行動を取れるということは魔法も使えるということ。それだけで厄介度は極端に跳ね上がる。

しかし、どうしてガルグリオス自身がその魔法の支配下にいるの

か。

あの魔法はガルグリオスただ一人しか使えない筈だし、またあれを扱うにはそれ相応の技量も必要になつてくるので、あの魔法を扱えるのはごく少数しか存在しない。

「なら誰があの魔法を扱える？ ナンバー2ですらその魔法の詳細を知らなかつたと聞いているんだが……」

だが、その思考も一時中断される。

ほとんどの正氣を失つたガルグリオスが俺に突進してくる。幸い、魔法などは扱わずただその身を以て襲いかかつて来るだけなので対処は簡単

「なつ！？ チイツ！」

そう思つていたが、どうやら甘かつたようだ。

あの状態にならうと、ガルグリオスは詠唱を開始し、また無詠唱で扱える魔法の射手などを乱れ撃つて来る。

舌打ち一つで後ろに”翔ぶ”。瞬間的に速度加速の魔法を掛け、先ほどまでいた俺の場所を着弾点にしていた魔法群を避け切る。

”翔んだ”と同時に宙に浮かびながら俺も同様に詠唱を開始。数節の短い中位の魔法を発動し、牽制。水糸を張り巡らせ、行動を制限しようとするが全て突破される。水糸もある一定のレベルになつてくるとあまり効果が出なくなつてくる。牽制には扱えるが、それを主戦力には些か物足りない。

故にそれと組み合わせ詠唱魔法を発動するのが俺の基本スタンス。

「”雹の霧雨”！」

魔力により顯現した小さな雹が、相手の頭上から降り注ぐ。

一つ一つの威力は弱いがそれが数を成せば、それは脅威へと成りうる。実際、あれを障壁などで防御せずに生身で受けければ数秒もすれば肉塊に成り果てるほどの殺傷力を秘めている魔法だ。

しかし、それを防御する知能も残っているのか、ガルグリオスは頭上に障壁を張りそれを防ぐ。

だが、それはこちらにとつては好都合。

”雹の霧雨”の利点は、一度発動さえすれば十数秒の間は相手の頭上に展開されている魔法陣から絶え間なく降り注ぐ。それはつまり相手はそれを防ぐ為にはそこにずっと縫い付けられ防御に集中しないといけないが、俺は自由に行動出来るということ。

「Dies irae, dies illa,
Solvet saeculum in favilla」

これから放つ魔法は俺の中に存在する内で、最高難度に属するクラス。
故に普段は使わない始動キーも共に口ずさむ。

「大海原を駆ける者。

それは生命を紡ぐ世界の理。

四辺を守護する一角にして、青を司る水の神 」

朗々と響くそれは目敏くもガルグリオスに発見される。

だが、未だガルグリオスは俺の魔法で足止めを食らっているままで、新たな行動を起こすことも、こちらへ來ることも出来ない。俺はこの刹那の間に全てを決める気持ちで詠唱を詠い続ける。

地面に現れる魔法陣は、その魔法と連動し蒼く光り輝き始める。輝きを増すそれは、まるで夜空に散りばめられた星のようで、辺りを明るく、そして優しく照らした。

「彼の者は命じた。

邪惡なる惡意を全て淨化せよと。

そして新たな生をこの世に誕生させよと

「

ようやく”雹の霧雨”は終わりを告げたらしい。

ガルグリオスの頭上に先ほどまで存在していた魔法陣は消え去り、こちらへ対抗しようと詠唱を開始し始めるがもう遅い。

「彼の者はそれを承り、そして実行した。

母なる海は時として優しく、時として荒れ狂う地獄を連想させるうねりを見せる。

その静と動を孕む命の源は、水の神の涙であった　　”水神の嘆き”！

魔法陣から飛び出すその水は、質量が既に水とは思えないほどのものであり、それが音速に近い速度で飛翔する。

それは銃弾などと比べても生温く、大型艦隊すら簡単に撃墜するほどの威力を秘めていた。

轟々と迫るそれを危険と判断したのか、ガルグリオスは詠唱途中の魔法を無理矢理発動し、その動きを止めている。

しかし、完全に発動を完了させた上位古代呪文と詠唱途中の魔法。どちらが勝つかは明白だ。

拮抗する時間も数秒で崩れ去り、そのままガルグリオスを飲み込んだ。

ウノツ!!

私はこんなところで負ける訳にはいかないッ！ 何としても成し遂げて見せる”願い”があるのだッ！

こんなところで、口説もれからない餓鬼は負けていらっしゃないのだツ！

最後の力を振り絞り、もう片方の腕を捨ててどうにか先ほどの激流から脱出す。

とも魔法行使に影響なんてものはない。
血が吹き出るもう片方の腕なんてものには気も掛けない。

今なら。今ならあの餓鬼も油断している筈。

あれほどの魔法を使つたのだから疲労しているだにこゝに
また決まつたと思って氣を抜いているに違ひない。

しかし、その時に妙なものが聞こえた。

そしてその餓鬼の眼の前に出た瞬間

「ゴホツ……？」

身体の間をナニ力が通り抜けていった。

口からはアカイミズが溢れだす。それは鉄臭く、また私がよく知

る臭いだった。

人間の身体を循環するアカイミズ。私の身体の約8%を構成するそれは、勢いよく口から吐き出される。

それを感じると同時に、どうして眼の前の餓鬼がこれほど早く、また強大な魔法を唱えられたのかを考えた。これは私、いや全世界の魔法使いの性みたいたのだろう。

普通ならありえない現象。それを眼の前の餓鬼は成し遂げた。

どうしてそこまで早く詠唱が出来た？

それを考えた瞬間、一つの言い伝えを聞いたことを思い出した。

”失われた禁呪”と並ぶ”失われた技法”を。

それは確かに現代でも成し遂げようとすれば出来ないことはない。

ただ、その難易度が恐ろしいほど難しいだけ。

技術面でも魔力面でも、そして精神力面でも。

「オブリガーズ
併謳詠唱……」

それが私の最後の言葉となつた。

最後に思考出来たことは、自分の身体が斜めにずれていいくことを感じとれたことだけである。

そして、私の眼の前から光は消え失せた

普通ならば”水神の嘆き”を発動させられればこちらの勝ちは決まつたも同然。しかし、俺はここで攻撃を止めなかつた。

俺の中のナニカが叫んでいる。ここで止めるなど。

それは経験に基づくナニカだったのかもしれないし、ただの第六

感だつたかもしない。しかし、そんなものは今は関係なかつた。
ただ生きるか死ぬか、それだけの話であつて、俺はそれを信じた。

これから行う魔法は既にこの世から消え去つた”失われた技術”の一つ。

現代でも発動することは問題なく出来るが、ただそれを扱いきる技量があるかないか、ただそれだけ。

確かに魔法の相性なども存在するが、一番必要なのはそれなのだ。

「その涙はしだいに形を作る。

まるで断頭台に吊るされるギロチンのように鋭く、また全てを切り落とすほど鋭利なものへと

一つ目の詠唱から一つ目の詠唱に繋げる謳うた。
それだけを聞けば単純に聞こえ、また容易だと思つ者もいるだろう。

しかし、それは間違いなのだ。

まず第一に、一つ目の詠唱と一つ目の詠唱が繋がる魔法など本当に数少ない。

現存する魔法ならば、十も出来るか疑問と思えるほど繋げられる数は少なく、また扱いが難しい。

ならば作ればよいのではないか？ と、思う人間もいるだろうが、魔法を学ぶ人間なら新たに”魔法”を作りだす難しさを身に染みて知つているだらう。

故に、現在ではその技法は”失われた技術”としてお伽噺で出てくる以外では耳にしない。

「彼の者は告げた。

我、四辻を守護する一角にして、法を司る番人なり、と。

故に我は嘆きを惜しみ、選定しよう。」

だが、俺はそれを可能にした。

ただただ一心不乱に自分が生き残るために。この弱者に優しくない世界で生き抜くために。

「ああ、どうして汝はそれほど罪深いのか。

ああ、どうして我はこの剣を振りかざさなければいけないのか。だが、我は決断しよう。」

それは遙か昔の人々が口にした謳うた。

「光を以て剣を照らし、闇を以て汝を拘束しよう。

闇夜を照らす水面の剣、仄かに宿る月の光。

それが交わり、振りかざした時、それは法の裁きなり
の裁き”

その人間達はその謳うたをこう呼んだ 併謳オブリガーズ詠唱、と。

「ゴホッ……？」

ナニカが叫んだ通り、ガルグリオスは生きており、俺の眼の前までその歩みを進めていた。

先ほどまで存在していたもう片方の腕がないことから、それを犠牲にしてもう一度生にしがみついたのだろう。しかし、それもこれで終わり。

先ほど発動した魔法がガルグリオスの身体を斜めに両断した。鋭利すぎたので未だその生命は終わっていないが、もう少ししたらそれも尽きるだろう。

「オブリガーズ
併謳詠唱……」

最後にそう言い残し、ガルグリオスの身体は真つ二つに裂け、絶命する。

夥しい血は魔法で氣化し、その場には乾いた肉が二つ残つただけ。それを見つめ、そして俺はその場を去つた。

去つた後には、その二つの肉も細切れになり、その場所には何か激しい争いがあつた痕跡だけしか残されていなかつた。

8・緩やかな時間（前書き）

この作品は原作「ネギま！？」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

あいつは本当に何者なのだろうか。
先ほどまで眼の前で繰り広げられていた戦闘、いや死闘を思い出
し考えてしまう。

魔法技術もさることながら、私が一番疑問に思つたのが、どうし
てあれだけの年齢であそこまで高密度の戦闘を繰り広げることが出
来るのかという一点。

未だ地に伏せている茶々丸が言つたことが本当ならば、あいつの年
齢は14、15歳くらいでしかないはず。

確かにその年齢ならばいくらか戦えるだろう。実際、大戦期に駆
け廻つたあの”馬鹿”も、戦場に出始めたのがそのくらいという噂
だ。

しかし、それは大戦期、つまりどこかしらも戦争をしており、経
験を積むにはもつてこいの状態であつたが、今はそんなことはない。
魔法世界であつてもそれは変わらず、公に戦争を繰り広げている
場所などは存在しなく、大きくて紛争程度が閑の山。

それだというのに、あいつはあれだけの経験を持つていた。

一体どこでその経験を積んだと言うのか。

それと同時に驚いたのが、あいつが最後に使つた”失われた技術
”の一つ、併謳詠唱オブリガーズだ。

私も文献などでは見掛けたことがあつたが、現実で見掛けたのは
これが初めてだつた。

少し昔、その文献を見かけた時に私も挑み、そして失敗した、現
代で言う”アルテマ・アート”究極技法”以上の難度を持つ技術。

それすらをあいつは巧みに扱い、そして相手を殺しきつた。

そこに侮蔑や嘲笑、軽蔑などは存在しない。

私も同様に人を殺したことがあるから。それにあいつはその行動に何一つ迷いなどは存在しなかった。

自分が犯した罪を後悔などするのならば私はそうしたかも知れないが、あいつはそうではなかつた。

信念を持ち続け、そして信念に沿つて行動する。そこには苦悩や後悔が確かにあつたかも知れない。だが、あいつはそれすらを乗り越え現在^{いま}生き抜いている。そんな人間をどういて軽蔑出来ようか。ただ怠惰に生きているのでもなく、ただ本能に従つて生きているのでもなく、あいつは信念を以て生きている。

「ふん……」

風を切る音が聞こえる。

どうせあの馬鹿が私と茶々丸が心配でこっちに向かつているのだろう。本当に心配性な奴だ。

幸い、私にはこれといったダメージはなく、また茶々丸もそこで重傷という訳でもない。ハカセに頼めば数日中には復帰出来るだろう。

奴が現れた。

黒衣を纏い、黒のフードを被るそんな奴が。
目線は見えないが、口元には安堵によつて綻んでいる。
こいつがどこまで

「怪我、ないか？」

優しい奴なのだろうか。

眼の前にはそれほど傷を負つていない吸血鬼と、少しだけ壊れた痕があるガイノイド。

やつと脅威が去つたのを確認し、溜息を零す。

これほど大規模な戦闘を行つたのは本当に久しぶりだつた。ここ一年は精々が水糸で細切れにするといったところだつたからな。

「怪我、ないか？」

薄影の、そのまた薄影にひつそりと隠れるように茶々丸を抱え込むエヴァンジェリンにそう問い合わせた。

「ふんっ……、そんなに心配せずとも私は無傷だよ」

「まあ一応の確認だな。茶々丸の方は？」

「少しやられてはいるが、明日にでもハカセのラボに行くとする。なに、数日で直るぞ」

そう笑うが、その笑みは少し翳りが見える。

それもそうだろう。自分の従者、それも家族のような存在が傷つけられたんだ。普通の神経を持っている者ならばそう易々と笑みなど浮かべはしまい。

俺だつてもし自分の大切な存在が傷つけられたら取り乱すかキレて相手を殲滅するかのどちらかの行動を起こすだろ。

しかし、彼女はそれでも俺を安心させる為か、それとも己の矜持故か無理矢理に笑みを見せる。

「……そつか

だから俺はこう答えるしかない。

俺から無理に笑うなどと言葉を掛ける資格などない。俺には大

切な者がいたことなどないのだから。

「お前がそのような顔をするな。これでも感謝しているのだぞ?」

「だがな……」

「シャキッとしたつー。」れでは助けられた私も慘めだらつ?」

「そう……だな」

せめて笑顔だけでも浮かべよう。

それが例え偽りに近いものとしても、俺は浮かべるべきなのだから。

ぎこちない笑みではあるが、それを見たエヴァンジェリンは満足したような顔で頷く。

「色々聞きたいことがあるが、今は時間が少なすぎるな」

時刻は既に零時を回り口付も変わっている。

「ならば、次の休みに私の家に来い

「えー……」

「何だその声はつ! 私が家に招くことなど本当に珍しこことなんだぞつ!つ?」

「だつて、ねえ?」

やつぱり俺にはシリアルスは似合わない。

この位明るくなくちゃやつていけん。

「大体さ、俺がお前の家に行くのを学園長とかにバレたら絶対に面倒だし。何だつたか、女剣士とスナイパーには変装中の姿は見られてるし。あー、最近本当に厄日だわ……」

「こきなり雰囲気を変えるな、この馬鹿っ！ ビリ対応すればいいかわからんだろうが！」

「普通でいいんじゃね？ これが俺の素だし」

これがここ”一年間”の俺の素の顔。
月の光がそんな俺の顔を照らし上げる。うん、今度ははしゃんとした本物の笑みだ。

「はあ……、心配した私が馬鹿みたいじゃないか」

「そうか？ ま、ありがとよ、わざわざ心配してくれて」

「ふんっ。……四日後の土曜日、夜の八時頃に家に来い」

「えー……、本気？」

「当たり前だつ！ と言つても、肝心のお前が私の家を知らないだろ？ から、そこは茶々丸に迎えを寄越す」

ああ～、これどう足搔いても無理なパターンが入ったね。
はあ、と溜息を零し仕方なく、ほんつとおつに仕方なく、渋々納得する。

「わかったよ、仕方ねえな……」

「何でお前はそんなに嫌そつなんだつー？ この私が招待しているところのこーー！」

そりや面倒臭いからに決まつてるだろ？

「 という訳だ、じじい

「ほあほあ、そつかそつか。スマンかつたの、エヴァンジエリン」

眼の前のじじいは笑みを浮かべて私の話を聞いているが、内心ではどう思っていることやら。

あの男が私の眼の前に姿を現した瞬間に結界を張ったからじじい達にはその姿はバレていらないはず。それは昌もことも同じく。

そう言えば、よく昌はあの結界を侵入しててきたな。いや、あの実力を以てすれば侵入など容易いことか。

「これからは結界をもう少し強化しておけ。大体、私の呪いが一時的に解けていなかつたら私でさえ危なかつたほどだぞ？ 餓鬼どもや立派な魔法使い如きだと間違いなく殺されてしまううな」

「……それほどかの？」

「ああ」

実際には私でさえ蹴散らされたほどだからな。

クツ、呪いが完全に解けてさえすればあんな無様を犯さなかつたというのこつ！

これも全てはあの馬鹿のせいだつ！

チツ、ムシャクシャする……

じついう時はさつさと家に帰つて”別荘”でリラックスするのが常套なのだが、未だこのじじいは私を帰さない。

イライラが募つているのをじじいも気がついたのだろう。鬱をさわさわと触りながら話しかける。

「今日のところはもう帰つてくれて結構じゃ。まだ僕も他の子達の報告を聞かないといけないからの」

「それならさつさと言えつー！」

バン、と音を立てながらソファから立ちあがる。

そのままズガズガと足を踏みならし、その部屋から外へと出る。

外へ出る瞬間、じじいからの視線が甚く気になつた。

「嘘か真か……、はてさて」

ピンポーンと家のチャイムが鳴り響く。

今日はあの無駄に白熱した激闘から既に四日が経過している。つまり

「お迎えに上がりました」

「……御苦労さん」

俺が”真祖”にして、最強の魔法使いである”闇の福音”、”人形使い（ドール・マスター）”、”不死の魔法使い（マガ・ノスフエラトウ）”、”悪しき音信”、”童姿の闇の魔王”という称号を得て恐れられているエヴァンジョン・アナタシア・キティ・マグダウエルの住処に訪れる日である。

行きたくねえ……。このまま布団に這いずり込んで惰眠を貪り尽したい。

でも行かなかつたらあの幼女はキレるだろうな。てかここで茶々丸を追い返しでもしたら、次の日には寝ている間に連れてかれそうだ。まあ寝てる時でも襲撃されれば間違いなく気付くけど。

はあ、あの時承諾したからには行かなくちゃ駄目だろうなあ。

「どうかなさいましたか？」

「……何でもないさ。それじゃ行くか」

「はい」

ガシガシと頭を搔きながら俺はそう告げた。

心なしか、茶々丸がどことなく安心したような気配を醸し出した
ように感じたのは俺の気のせいだろうかねえ。

あ、そういう、

「身体の方はもう大丈夫なのか？ 大破とまではいかなつたけど、
結構壊れてたる」

「それについては、昨晩に修復は完了しています。現在は、先のバ
ージョンにバージョンアップをかけ、戦闘技術は勿論、計算速度や
感覚などの五感、周囲の索敵範囲など諸々の能力が向上していきます。
数値に表すと全てを組み合わせた結果、前回と比較すれば1、8倍
ほどの性能かと」

「……スゴイネー」

「ありがとうございます」

まさか身体の調子を尋ねただけでこれだけの返事を得られようと
は。

「というか、君つてどっちかっていうと無口キャラじやなかつたつ
け？ 何その饒舌、俺物凄く吃驚なんだけど。

確かに無口キャラの人間が喋ればそれは高ポイントかもしれない
けど、まず君は人間じやないでしょ？ それ以上にやっぱ人には限
度つてものがある。あ、人じやなかつたつけ。それじゃしようがな
い訳あるかつ！ 何！？ 何でなの！？ 俺が悪いの！？ 俺
があの時にもつと早く駆けつけていたら良かつたの！？」

はあはあ……、何で俺は心の中で一人ノリツッ「ミミをしてるんだ

……？

あ～、もう何でもいいか。これ以上考えても俺の心労がたまる一

方で一欠けらも俺に得などない。

会話はそこで打ち切り、そのままエヴァンジエリンが待つその場所まで先導して貰う。時刻は大体夕焼けすらも見えない、完全に日の暮れた時間帯。完全に暮れたと言つても、まだまだ人間が活動するには問題ない時間帯で、俺達の他にも周りには人が結構な量が通り過ぎてゆく。

俺の家を出てから茶々丸との間で会話はない。口を開こうにも、一体どのような会話が成り立つかわからないので迂闊に話すことも出来ない。普通の人間ならば最近見たテレビ番組や映画などでどうとでもなるが、相手は吸血鬼の従者。人間社会にどれだけ浸かっているのか全く予想が出来ない。

やむなく俺は茶々丸の横顔を眺めてみる。

鮮やかな亞麻色の髪が波打ち、それが月光に反射し煌いている光景は甚く幻想的であり、またそれを仕立て役とした端正な容姿。確かに彼女はガイノイドという女性型アンドロイドだが、どこかそこには人間味を感じさせる。それは付喪神という観念を俺が持つてゐるからそう思つてしまうのか。

付喪神とは本来、長い時を経た依り代に神や靈魂が宿つたものを指すが、俺としては命無き、精神無き存在にそれらのものが宿つたことだと捉えている。茶々丸はガイノイドという命も精神もない口ボットだが、完全自立型ということと科学だけではなく自然や神秘そのものを指す魔法の一いつが混ざり合つて生まれた存在だ。それはただ物が時を経て靈などが宿ることよりも早くにそれらは生まれる。つまり自我という精神が生まれ、そして自我を殺すということはその存在を殺すということと同義であり、そこから自我が生まれるということは命が生まれるということに繋がつていく。

あ～、何言つてのかわかんなくなつてきた……

つまりあれだ、茶々丸は人間っぽいつてことだ、うん。

……何か極論過ぎたような気もするがよしとしよう。

実際、こうして二人並んで夜の道を歩いているが、どこか楽しそうな雰囲気が窺える。無表情だけど。

「……」

「あの？」

「気にするな」

「はあ……」

そこに見せる表情は困惑。

やはり人間味がある。いや、もしかすると下手な人間より人間らしいかもしない。

無表情に見えて、どこか人間を感じさせるそれに対し、既に俺はロボットとは見れなくなっていたのかもな。だが、それでもいいのかもしね。俺にとって、人間と非人間の区別などどうでもいいことなのだから。

人間だから、人間でなければ、人間しかなどという言葉にはもう飽き飽きなのだ。そこまで人間という存在は偉いのか？

俺は人間という存在がそれほど高尚なものとは到底思うことなど出来ない。

あれほど意地汚く矮小な存在を、どうしてそのように思えるのか。それならばロボットだろうが吸血鬼だろうが、そちらの方が良いに決まっている。

「……」

「……」

無言で歩く二人の間にはどこか温かい雰囲気が漂っていた。

9・それぞれの想い（前書き）

この作品は原作「ネギま！？」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

9・それぞれの想い

「ようじや、我が家へ。」この私が歓迎しよう

「御丁寧にどうも」

「茶々丸も御苦労だつたな」

「いえ、それほどでもありません」

案内されて出会った第一声がこれだった。

何と言うか、固くね？ もう少し碎けた調子でもいいと思うんだ、俺は。別に知らない仲もあるまいし。まあそれほど仲が良いとうわけでもないけど。

そんな感想を漏らしながら中へと案内される。

そのままソファに座つて会話でもするのかと思えば、リビングを無視して何故か地下へと向かう。

もしや俺を暗殺するつもりかっ！？ とボケてみたら殴られた、結構本気で。呪いがなかつたら間違いなくトマトみたいになつたに違いない。

というか、この家人形多過ぎだろ。いくら“人形使い（ドール・マスター）”の称号を持つてはいるといえこれはやりすぎだろ。この部屋になんか所狭しと人形が並べられていて、物凄く不気味なんだけど。

そんな自慢げに胸を反らされても俺はビリ反応したらいかわかんねえよ。

「では行くぞ」

「あ？」

その言葉を放った瞬間、俺達はその薄暗い部屋から強制的に転移

させられた。

次に眼を開けば、そこは青空が広がるリゾートビーチ。辺りを見渡せば立派な中世の城までが存在するそこは、楽園に近い場所かもしだれない。

「ダイオラマ魔法球か？」

「やはり知っているか。ここが私の”別荘”だよ。どうだ、凄いだろ？？」

「まあ、な」

いくらか俺も見てきたことはあつたが、実際に入つたことはあつたか。そういう”糞野郎”に借りたことがあつたな。あいつの奴はここまで綺麗じやなかつたから一瞬わからなかつた。あいつは機能重視みたいなことを言つてたが。

にしても予想外に快適な場所だな。気温湿度は適度に保ち、空気は汚染されてないから綺麗の一言に尽きる。外では滅多に見ることの出来ないエメラルドグリーンの海に、白い宝石のように見える砂浜、少し首を回せば熱帯雨林のジャングルなど色々な景色が楽しめる。

「ここまでボーッとしてるんだ？」

周りの景色を堪能しているとエヴァンジェリンに呆れられた。

「ここまで綺麗な風景を見るのは久しぶりだつたからだ」「タクツ……、さつやとこつちに来い」

そこには種々様々な料理が並べられる。

給仕をしているのは茶々丸にそっくりな人形たち。

その中の一体に席を勧められ、俺は席に着く。眼の前にはエヴァ

ンジエリン、その横に茶々丸が控えている。

「乾杯だ」

「何に対しても？」

「そうだな……」

種族を超えた友に巡り合えたこと、とこりのはじりだ？

「ぬ……」
「あ……」

眼の前にいるのは、つい先日にやり合った坊やとその保護者である神楽坂の二人。

手に持つのはこの店のコーヒーが一つと、ビリヤリ私と同じ目的で訪れたらしい。

「こ、こんにちわエヴァンジエリンさん　って！？　大丈夫だつたんですかっ！？　あの後、強制的に転移させられて戻りつにも結界があつて入り込めなくて心配してたんですよ！？」

「あー五月蠅いぞ、坊や」

こんな真昼間の往来で転移だとか結界だとか口にするとは……。魔法の秘匿という意味を本当に理解しているのか？　正直疑問だよ、私は。実際に横にいる神楽坂にはバレてはいるようだし。

それをじじいは罰しない、か。まあそういうつた。坊やはこんなナリでも彼の”英雄の息子”。優遇はするだろうし、小さなミスは大目に見る。それはあのタカミチも同じだろつ。

……つづく甘い連中だ。もしこれが普通の魔法生徒なら問答無

用で置する癖に。本当に 嫌な連中だ。

「何よその言い方は！」「これでも私も心配してたのよつ！？」

「ふんつ、貴様らみたいな餓鬼に心配されずとも問題はない。それ以上にいいのか？ こんな往来で魔法の存在を大声で話して？」

「あつ……」

甘過ぎる。

確かに10歳の子供に求めるのも酷なことかもしれないが、それでもこの道を歩むとこつこつとを決めたのなら年齢などは既に関係ない。

事実、私が知るあの”馬鹿”も最近知ったあの”馬鹿”も間違いなく10歳の頃から選択というものをしていた筈だ。

「す、すいません……」

眼の前にいる坊やはそんな存在達とは到底似つかわしくない。

「結果だけ言つてしまえば、茶々丸が少し破損しただけであいつは撃退したよ」

だから詳細を畳す。

じじいも同じように対処したが、それが持つ意味は全くと言つていいほど違う。

じじいはあいつの存在を気付かれたくなかったから、坊やはただその事實を告げるには早すぎると思つたから。

並んで買ったコーヒーを口に含めば、それは今自分が持つ心のように冷やかになっていた。

失望、といふには強くはないが、それでも少し落胆した気持ちはある。

確かに自分は期待していたのだろう。稀代の英雄の息子のだから、それはそれは実力が高いだろうと。しかし蓋を開けてみればただの甘い餓鬼。

確かにそれなりの実力を私に見せつけた。これは認めよう。齢10にして、呪いで大半の能力を封じられているにせよ魔法で打ち勝つたのだから。

しかし、その後の行動が私を幻滅させていた。

戦場にも出たことがない餓鬼には大層堪える殺氣だった、それは理解出来る。だが、それでも抗つて欲しかった、せめてもの行動を起こしてほしかった。

過剰な期待と言つてしまえばそれまでだし、やはり私もどこかで”正義の魔法使い”同様に坊やを特別視していたのかもしれない。

（まああいつからこんな優等生みたいな性格の息子が生まれるとは思いもしなかつたがな……）

それも周りの大人による教育のせいなのかもしれないのだがな。

「あ、そうだ！」

無理矢理この雰囲気を変えようとしたのか、神楽坂は口を開く。

「聞いたわよ～？ エヴァンジェリンあんた、ネギのお父さんのこと好きだつたんだつてねー」

「ぶつ！」

何故それをつ！？

またかつー？

「き、き、貴様、やつぱり私の夢を ッー？」

「い、いえ、あの……」

「チツ……！」

胸倉を掴もうとしたが 止めた。

「 だが奴は死んだ。10年前にな……」

この感情は何なんだろうか。

感傷？ 愛情？ 憎悪？

それのどれにも当て嵌まりながら、それのどれもから外れるその感情を、私は持て余す。

だが、それは次の言葉で碎け散る事となる。

「でもエヴァンジエリンさん。僕、父さんと サウザンドマスター」と会ったことがあるんです！」

「……何だと？ 奴は確かに10年前に 待て？ その公式発表を出したのはどこだ？ あの公式発表を公開したのは確か 元老院かッ！」

改めて考えてみたらそうだ。

確かに奴はトルコのイスタンブールで消息を断つたとされたが、それを証拠とするものは何だ？ 入国履歴？ そんなものは簡単に偽装出来る。それに何故消息を断つことと死亡が繋がる？ あいつは私も認めたバグだぞ？ それを倒せるのは同じバグである”千の刃”くらいしか私は思い付かない。

ならば何故そのような公表がなされたんだ？ それは簡単か。元老院の馬鹿共の不利益になる”ナニカ”をあいつが掴んだ他ならな

い。

そうだ、冷静に考えてみればおかしな点などいくらでも見つかる。
それなのに何故私は今まで気が付かなかつたんだ？

「…………それほど狼狽していたんだろうな」

「Hヴィアンジエリンさん？」

「京都だな」

「え？」

こんなに清々しい気分は久しぶりだ。

「京都に行つてみるがいい。どこかに奴が一時期住んでいた家がある筈だ。奴の死が嘘だとするなら、そこに何か手掛けたりがあるかも知れん」

「き、京都！？ あの有名な……、ええーと日本のどの辺でしたつけ。困つたな、休みも旅費もないし……」

「へえ、京都かー。ちょうど良かつたじゃんネギ。ねえ？」

「ああ」

あの”馬鹿”に未練がないと言えば嘘になるかもしれん。だが、私があいつに固執する理由はもう呪いしか残つていない。

何せ私を残し、どこの馬の骨かもわからん奴と子作りしよつたんだがらな、あいつは。

呪いに関してもあいつ自身が解きにくくも良し、坊やが解いてくれるといつのならそれでも別に構わない。

この15年の歳月は本当につまらないものだつた。

3年という約束が過ぎ、絶望に追い込まれ、茶々丸という新しい家族を得たこの15年。

だが、それにも変わり日は訪れた。

海原昌。

私すら扱えない失われた技術を悠々と扱いこなし、私の全盛期とほぼ同等クラスの実力を持つ人間。そんな存在に私は出会ったのだ。姿形は”馬鹿”とは全くと言っていいほど似つかわしくない。だが、どこかでやつと被る、そんな奴。

「興味は尽きんな……」

あいつがいる間は退屈しなさそうだ。

まああいつは嫌がるだろうが私には関係ない。

「何たつて私は”悪い魔法使い”だからな」

クツクツクと忍び笑いを漏らしながら私は坊やたちと別れを告げる。

さあ、今日はあいつが私の家にやつてくる日だ。精一杯持て成すとしようか！

「呪いの解呪？」

「そうだ。私を戒めているこの忌々しい呪いをお前の力で解けないだろうか？ 勿論それ相応の対価を払うことは約束する」

食事を終えた後にいきなりそつ切り出され、俺は少し狼狽する。狼狽している様子を見られると弱みを握られそつなので、そういうように食後のお茶を飲みながら黙考。

第一に、もし俺が彼女の呪いを解けた時のメリットについて考え

てみよつ。

まずは対等なる友好関係。いや、これは今でも作られているだろうからより強固な友好関係とでも言つておこつか。

一つ目にはこの麻帆良学園で起こる厄介事を全て彼女に丸投げ出来る。勿論、俺が巻き込まれたものでも丸投げが可。

三つ目は俺が知らない魔法などを教えて貰えること。いくら平和な日本でも、一度裏に浸ればそれだけ危険とは隣り合わせなのは変わらない。それはどこまでついてくる呪いと同じようなもの。故に力はあるだけで安心出来る。

第一に、デメリットについてはどうだらうか。

まずは学園長並びにタカミチ辺りに俺の存在を感じかれる」と。今では何とかバレてはいないという崖っぷちの状態に立たされる俺にとってこれは少し厳しい。

「一つ目は……、あれ？ 特に無い、か？

まで良く考える。学園長達に気付かれる以外のデメリットは……

ないな。こう考えるとメリット三つとデメリットが一つ。内、メリットの一つはもう持っているのと同義だから実質はメリット二つにデメリットが一つ。

デメリットについても、もしバレたとこひどく知らんぷりを決め込むことも出来るだらうし、それで厄介事を持つて来られようと全てエヴァに丸投げで回避が可能。

結局は±で言えば+か。

「一つ質問だ

「何だ？」

俺の質問に快く答えてくれそうだ。

だが、この質問は初めて出会った夜に聞いた質問と全く同じ。そ

れを答えてくれるかどうか。

「誰に呪いを掛けられたんだ? ”闇の福音”とまで言われ恐れられたお前に呪いを掛けられる存在など世界でもごく少数しか存在しないだろ? 」

「……”サウザンドマスター”だ
何……? 」

”サウザンドマスター”

それは今では死んだと噂されるが、それでもなお絶対的な人気を持つ稀代の英雄。

魔法世界の大戦を収束に導いたとされ、”千の刃”や”サムライマスター”などと共に”紅き翼”という世界最強の集団を作り上げた世界最強の魔法使い。

そして今現在この学園で教師をしているネギ・スプリングフィールドの父だ。

確かにそれほどの魔法使いならば”闇の福音”に呪いを掛けることくらいは出来るだろ? 」

「それは本當か? 」

「……ああ 」

「…… 」

本当に恐々しさに呴くエヴァンジエリンに少しの同情の念が浮かび上がる。

「どうだ? やつてみてはくれないか? 私の見解だと、お前の実力は間違いなく世界最強クラスの実力を有している。それを証拠として、私ですら操ることが出来なかつた”失われた技術”である併オブリガーズ

謳詠唱を悠々と扱つてゐる。魔力にしても”サウザンドマスター”

を超えているだろう

だが、俺は迷っていた。

もし絶対に解ける保証があるのなら、俺はすぐさま頷いただろう。しかし、呪いを掛けた相手が悪すぎる。

“サウザンドマスター”の話は“千の刃”から何回も聞いたことがある。あのバグの塊のような存在に勝ち越している、唯一あのバグに土を付けた存在。

そんな化物のような実力を持つ存在が掛けた呪いを俺が解くことが出来るのか？

確かに戦闘能力と呪いとはイコールで結ぶことは出来ない。

それはそうだ。呪いのエキスパートと“サウザンドマスター”が戦えば十回中十回は“サウザンドマスター”が勝ちを拾うだろうが、呪いに関しては一歩劣るだろう。

しかし、しかしだ。それでも彼の者は世界最強の魔法使い。呪いに関しても高みに立つ者だろう。

それに対して、俺は解呪など専門外に過ぎない。魔法の運用などなら自信はあるが、解呪は滅多に扱うことがない。

だから次の言葉を聞いた瞬間に俺は茫然としてしまった。

「ちなみに“サウザンドマスター”はお前が想像しているような最強にして最高の魔法使いではないぞ？……まあ最強ではあったが。あいつの本性は魔法学校中退の出来損ないの魔法使いだよ。それを証拠にあいつが扱える魔法はほんの4、5個だ。実際に私の目の前でそう言つていたし」

はあ？

「あいつは魔法のセンスは確かに天才的だ。それこそ天賦の才能と呼ばれるほどの、な。だが私に掛けた呪いだって自分の膨大な魔力に任せて無理矢理掛けた呪いだ。それならば運用などが巧いお前なら解ける筈なのだ」

天才（笑）だったのかよ……
てかそれで“千の刃”に勝つってどんだけだよ。やっぱりバグじ
やん……

10・解説、そして夢幻（ゆめまぼろし）（前書き）

この作品は原作「ネギま！？」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

10・解呪、そして夢幻（ゆめまぼろし）

沈黙が降りるその中で、とうとう俺は口を開く。
少しでも希望があるのならば、それに賭けるというのも一興。No.
○ L i s k H i g h R e t u r n 。これで賭けないのは男じ
やないだろ？

「……OK。試してみよう」

「本当かつー？」

ガバツと椅子から立ち上がるエヴァンジエリンを見ると、どこか
笑いが漏れてくる。

何と言うか、あれほど魔法世界で恐れられた存在がここまで可愛
らしい様子を見せてくれて。やはり人伝の情報はあまり信用出来な
い。情報屋と呼ばれる存在も、俺が信用するのは一人のみ。

「対価は何でもいいだよな？」

「私が用意出来るものなら何でも用意しよう」

「ならまず一つ。俺の存在を出来るだけ麻帆良関係者にバラさない
でほしい」

「勿論だ」

「まあもしバレた時はバレた時でいいけどな」

既にバレている可能性もないってことはないからな。

多分感づいてはいるかもしれないが、俺という存在だということが
はバレてはいけない筈。実際、あの剣士とガンナーを助けているから
報告くらいは上がるてるだろ？

俺が話し始めるとエヴァンジエリンは落ち着きを取り戻して椅子

に座っている。

その様子は威厳たつぱりなのだが、先ほどの行動を見ていると小さな子供が背伸びをしているのと何ら変わらない。正直、少し可憐いと思つ。

「一つ目は麻帆良関係者のせいや、麻帆良で起こった面倒事を全て解決してほしい」

「それはお前に関係ないことでもか？」

「いや、それはない。俺に関係することだけだ」

「……私が全盛期の能力を取り戻すことが出来たら容認する。だが、もし私の能力が戻らなかつたらこれには首を振れない」

「わかつてゐや」

もしこの間みたいて世界最強クラスがやつて来てしまえば、封印時のエヴァンジエリンでは太刀打ち出来ないことは証明済みだ。

それでも無理に行かせれば、それは丸つきり無駄死ににしかならない。

「最後に　俺を鍛えてくれ」

その言葉にポカーンと口を開けるエヴァンジエリン。横に控えていた茶々丸はそんな主を見てポカーンとしている。

それにも、何がそこまで放心させるんだ？

「お前……、それほどの力を持つていながらまだ力を欲するのか？」

「当たり前だろ？」

その回答に絶句した表情を見せる。

それほど可笑しな答えではない筈なんだが……

力などあつて困るものじゃないし、とりあえず自分に身に付けら

れるだけの力は身に着くだけ欲するのが普通じゃないのか？

「……それはそうだが」

「だろ？ お前は600年という歳月を生き抜いてきた強者だ。それほどの存在ならば俺が知らない知識を一つや一つくらいは容易く知っているだろ？」

「確かにあるだろが……、それでもお前が持つ併謳詠唱オブリガーズほどの超高難度の技術は流石に知らないぞ？」

「別に切り札的存在じゃなくとも、基礎を上げればそれだけ自力が上がるから問題ない」

確かに切り札という存在は強力無比だが、それに頼らなければならぬほどの危機に陥る前に、その危機に陥る前に相手を倒すだけの自力が欲しい。

実際、俺には切り札と呼べる存在は併謳詠唱オブリガーズの他にもいくつか存在しているので、早急な問題としては自力を上げる方が先だ。

「今言える俺の願いはこれだけだ。返答は？」

「勿論」

是、だよ。

巨大な居城から幾分か離れた場所は開けており、障害物はない。目測にして500メートルほどだろうか。

どうしてこのような場所を作ったのかエヴァンジエリンに尋ねてみると、どうやらここは鍛錬をする為に作ったとのこと。確かにこれほど広ければ威力を抑えさえすれば上位古代呪文を発動しても何ら問題にはならないだろ？

それを話すと、本気を出すのならばそれ相応の場所も用意していると言われた。そこから察するに、この場所は軽く手合わせをしたりするのに使われるのだろう。

今回はここを使ってエヴァンジェリンの呪いの解呪を試みる。

呪いといつものは総じて解呪に失敗すると解呪の術者に反発することが多い。これは陰陽術を最もポピュラーか。西洋の方にも色々あるが、やはり呪いと聞けばこの極東の陰陽術がトップに君臨する。

「呪いの種類は？」

とりあえずは呪いの種類を聞いて対策を施す。

呪いについてはあまり知らないので、こうして先に聞いてそれぞれに対応する以外方法はない。

「……登校地獄」

「はあ？」

今、何て……？

「だから登校地獄だと言つているだろうつ！？」

「……何だ、それ？ そんな馬鹿みたいな呪いが存在するの？」

名前から既に巫山戯ている雰囲気しか感じられない。

だがエヴァンジェリンから滲みだす雰囲気には真面目さと悄然さしか感じとれない。

「マジかよ。

「あ、あ……、そんな呪いは初めて聞いたんだが、何か文献とか資料とか持つてねえの？」

「……ない。私も600年と生きてきたがこんな呪いは初めてだつたんだ。じじいやこここの図書館島も調べてみたが結果は……」

「零、か」

「ああ……」

そんなに珍しい呪いなのか？ それとも”サウザンドマスター”オリジナルの呪いなのかもしれない……

でもエヴァンジエリンの言うことが事実ならば、オリジナル魔法を生みだせるような魔法使いでは決してない。いや、圧倒的センスで呪いを生みだしたっていう考えも捨てきれないか。だとすると物凄く厄介極まりない。

ただでさえ俺は解呪は専門でないといふのに、肝心の呪いの情報も全くなき。そんな状況で解呪を成功させるのは正直難しい。

「しょうがない、駄目で元々だ。試してみるか……」

俺は意識を集中させる。

まず解呪には色々と方法は存在するのだが、俺が選ぶ手段は呪いの視認化だ。元々は魔法の流れを視認する為に作られた魔法だが、俺は改良し魔法の流れは勿論のこと、精霊や惡霊などと言つた”眼に見えない存在”を知覚する為に編みだした技法なのである。

それによりエヴァンジエリンの方を確認した瞬間、俺は絶句した。彼女の周りに蔓延る黒い靄。彼女を動きを封じ込める銀の鎖。そしてそれらを支配するかのように佇む死神のようなナニカ。

特にその死神のようなナニカは圧倒的な気配を持ち、自分を知覚している俺に向かつて威圧を発する。

気を抜けば持つていかれる……ツ！

氣を強く保ち、一歩一歩地面を踏みしめてエヴァンジエリンの元へ、そしてナニカに近づく。

それに伴い俺を威圧する氣配は強まり、また俺の変化にエヴァンジエリンは戸惑いの声を上げる。しかし、今はそれらに氣をやる余裕など存在しない。

地面を這うかのような鈍さでようやくエヴァンジエリンの前に立つことが出来た。

死神のようなナニカは直接俺に何かをするようなことはなく、ただただ威圧するばかり。

さて、エリからどうするか……

正直、これを完全に解呪することは俺には不可能だ。出来て少し呪いを軽くするくらいか。

流石は”サウザンドマスター”ということか。これほどの呪いを掛けるのは並大抵の呪術者でも無理の筈だ。

だが、これでも俺には意地がある。あんな顔をした少女を放つておくことは出来ればしたくない。

俺も変わったな……

裏の世界から抜けだし、表の世界で暮らしへ始めて早2年の月日が経つた。

時には人を騙し、時には人を殺め、そして時には血塗れで過ぎた12年。

あの頃の”自分”はなりを潜め、今では随分と甘ちゃんになつたもんだ。こんな俺を見れば昔の俺を知る人間からは笑われるに違いない。もしかしたら本人だと信じられないかも知れないな。

心の中で自分に苦笑を零し、そして前を向く。

「さて」「

黒い靄は何なのかよくわからないし、死神のようなナーフは干渉し切る自信がない。故に俺はエヴァンジエリンを戒める銀の鎖に干渉する。

雁字搦め、法則性など全くない、本当に適当に、そして無理矢理力強く巻きついている鎖をせめて正しい形に戻して行く。

「ツ……！」

「昌つ！？」

「昌様つ！？」

一人の悲鳴が聞こえるがそれらに反応する余裕は欠片ほども存在しない。

どんだけ念を込めて呪いを掛けたんだよ、英雄はツ！ 少し戻すだけでも一苦労じゃねえかツ！

頭に鈍器でぶつけられるような激痛が進るが、歯を食い縛つて耐え忍ぶ。

後もう少しなんだ……ツ！ 後少しで……ツ！

身体が揺れ、膝を付く。しかし眼光はエヴァンジエリンを戒めるそれらに向けたまま。

最後の鎖を元に戻せば

「少しひこれでマシになつたろ？ エヴァン、ジエリン……」

「今は休め、我が友よ」

そのまま意識を失った。

これは夢だ。

意識がはつきりしなくともこれくらいは理解出来る。だから断言しそう、これは夢だと。

眼の前に広がる惨劇。元は草木が覆い茂っていたであろうその場所は無残にも焼け焦がれ、まるで大砲で穿ったような痕が所々で見られる。

その場所は現世に地獄を体現したかのようで、人が死んだ時に発せられる死臭が立ち込め、それらがまるで結界のようになり一面を覆い隠す。

穿った場所には赤い血が溜まり池と化し、元は人間であったであろう物体がそこかしこに転々と転がっている。

”死”

その事象を体現するその場所は、まさに地獄に相応しい。

「……」

その地獄で立ちつくす一人の少年。いや、少年と呼ぶには些か早く、幼児と捉えても何も問題はない。

その幼児の身体は傷だらけでいつ倒れてもおかしくない、そんな状態で下を向いて立ちつくす。

そこは幼児が少しの間だけだが育った場所だった。親は無く、捨て子。そんな彼を拾つて育て上げた親代わり。同年代の友達。そん

な人達と暮らしていた幼児。

そんな幸せに近い世界は一瞬で消え去ることになった。

理由は単純で、その集落の付近では毎日のように紛争が起こり、その紛争の被害がその集落まで届いたというだけ。そんなありふれた不幸に巡り合わせたのだ。

運が悪い、そう言つてしまえば終わりのこと。先ほども言つたように、この位の不幸は世界中でありふれているのだ。

だから幼児が初めて覚えたことは”理不尽”という名の”暴力”だった。

力さえその幼児にあつたのなら、はならなかつた、そう幼児は幼いながらも理解したのだ。

大体、その紛争の理由は大仰なものではなく、ただただ部族間の領地争いという小さな理由。いや、その部族間にとつては大きいことなのかもしれないが、一般的、客観的に捉えればほんの些細なことに過ぎないだろう。

しかし、それすらも関係なく、その集落は紛争に巻き込まれ呆気なく滅亡した。

幼児は眼の前でその光景を見ていた。

遠方から飛翔してきた光に撃ち貫かれる友達。空から降り注ぐ雷に焼き殺された親代わり。集落の人間を守ろうとその紛争をしている部族達に突撃し、そして返り討ちにあつた知り合い。

時間にすれば一時間にも満たない、そんな短い時間の間で、集落に住まう幼児以外の人間は全て死に絶えた。

そんな中、幼児が生きていたのは運が良かつたことと、それ以上に幼児には力があつたからだ。

身に宿る膨大な魔力。それは身に宿すだけで魔力抵抗値が上がる。

その存在のおかげで幼児は九死に一生を得たのだ。

「どうして……」

魂の慟哭。

それは理不尽な暴力に踏みにじられた幼児の叫びだつた。涙など既に枯れ果て、代わりに出てくるのは血の涙。魔力の暴走のせいで身体は悲鳴を上げ、身体の至るところから血が吹き出る。

しかし、少年はそれを制御する。

”力”

それは幼き少年が唯一理解出来た生き抜く術。

”理不尽”な”力”に巻き込まれ、”理不尽”な”不幸”に巡り合つ原因になつた”力”。それを少年は手にしたのだ。

「少年、力が欲しいか？」

「……ああ、欲しい」

突如掛けられた声にすら驚くことなく、少年は淡々のその言葉を返す。

圧倒的才能。世間ではそれは”天賦の才”と呼ぶ。それを少年は有していた。

「どんな”理不尽”すらも乗り越えられる圧倒的な”力”が……ッ！」

こうして少年の道は決まつてしまつた。

それは運命すらも捻子曲げる。ここから そこそこから”運命”が変化したのだ。誰にも予測することなど出来ない、不確かな未来。

それと同時に少年の価値観は変わる。

人間の命など、力ある存在からすれば路傍の石と変わらないのだと。弱者が悪で、強者が正義と。

それは圧倒的に間違っていて、それは須らく正解だつた。

自然に変えれば弱肉強食に世界となり、弱者は強者の食料でしかなく、また世界を形作る歴史など、全ては勝者が書き変えた都合の良い出来事でしかない。

だが、それは全て事実なのだ。

”力こそ正義”

「いいだろう。暇潰しで適当に旅していたが思わぬ拾い物があつたな……。少年、名は？」

それが少年の胸に宿つた指標。

「メア……、メア・リヒトバーサ」

「メア……、確か”蒼海”という意味だつたか？　まあいい、名に意味を見出すなど不要だからな」

眼に宿る光は薄暗いものでもなく、光り輝くものでもない。

「付いてこい。この”理を壊す者”カタストロファイ”がお前を最強の強者に育て上げてやる」

眼の前を行く壯年の男性の下に無言で付いていく。
進む一步は力強く、そこから少年の生は始まった

11・入り乱れる思惑（前書き）

この作品は原作「ネギま！？」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

11・入り乱れる思惑

「ん……」

柔らかな光が眼に入り、失っていた意識が浮上する。瞳を開き自分の姿を確認してみると、じつやう氣絶していたらしい。ベッドに横になりながらうとうと思つた。

身体の違和感は 異常なし。

あれほどの強烈な呪いの修正だつたので、それなりの代償を覚悟をしていたのが拍子抜けに終わる。

力チ、力チと掛け時計特有の音が部屋に鳴り響く。部屋に俺一人だけで他の存在 つまりエヴァンジエリンや茶々丸の姿は見られない。

ベッドから這いて、そのまま部屋の外へと足を進める。扉を開くと長い通路が眼に入り、その先には曲がり角が左右に展開される。後ろの方にも道は広がり、どちらに歩みを進めようか暫し考えるが、どちらでもわからないのに変わらないので、気分的に直進を選択。曲がり角まで辿り着けば、これまた気分的に左を選べ。

最近は運がないなあ、と嘆いていた俺であるが、ようやく回復の兆しが見られた。

歩みを進めたその先には、この場所の主であるエヴァンジエリンとその従者である茶々丸の姿が見られた。

俺はそこに嬉しくなりながら朗らかに挨拶すると

「 何をやつとるか、貴様わああああああああッ！」
「 ふげりつー？」

何故に右ストレート？ 無駄に腰が入つてゐるから威力も申し分ない。世界を狙えるぞ？

そんなボケをかます余裕は心の中だけしか存在しなく、現実の俺は綺麗に放物線を描きながら宙を飛ぶ。地面に降り立てばそのまま数メートルの距離を滑り、ようやくその動きが止まつた。

ちょっと、本氣で死にそつなんですけど？ てか何でこんな仕打ちなの？ 僕つて君の呪いを緩めてあげたよね？ もしかして変わらなかつたとか？

「それはない。実験をしてみたところ、麻帆羅学園から自由に外に出られるようになつたし、今まで学校の行事であつた修学旅行などにも行けるようになった

「マジで？」

「ああ。これが本来の”登校地獄”の形なのだろうな。これなら卒業さえすれば自動的に呪いも消滅する。……本当にありがとつ」

真面目な顔で真摯に礼を告げられ、俺も少しくすぐつたい。面と向かつてこんな言葉を掛けられたのは初めてだからな、そう言えば。

「ただ、私の能力を縛る呪いは継続してゐるから全力は出せない

「そつか」

「だがつ！」

「だが？」

「”登校地獄”が封じる私の能力の割合は三割ほどで、残りの七割

は麻帆羅を覆う大結界によるものなのだ」

「つまり？」

「麻帆羅外の地域外ならば能力は全盛期の七割を発揮出来るといつことだつ！」

最強の魔法使いの七割……

普通の魔法使いじゃ、まあ太刀打ちは出来ないだろうな。この間の”殺人科学者”ランクや世界最強クラスには些か物足りないが、それでも破格の能力には変わりない。でも俺の丸投げ計画も無理といつことか。まあエヴァンジエリンの笑顔を見れただけ良しとしよう。

「良かつたじやん」

「ああっ！ ジャナ――――いつ！」

だからどうしたんだ？

「何で貴様は出歩いとるんだっ！ ベッドで大人しくしておけ！」「でももう完全回復してるぞ？ 実際に確かめてみたからな」「ですが冒様。冒様が気絶なさつた時は本当に危ない状態でした」

横に控えていた茶々丸が口を挟む。

「そうなのか？」

「はい。魔力欠乏状態に加え、身体の中核機能の七割が機能停止、また呼吸停止、心停止と明らかに死亡寸前まで陥つていました」

「……良く生き残つたな、俺」

完全に死ぬ一歩手前、いや三途の川に身体の大半が浸かつてゐる状態じゃん、それ。

それで良く生き残るな。どんな構造してゐるんだろ？

「本当です。あの後、私やマスターはあの手この手、魔法薬などを活用し無理矢理中枢機能を再活動させ、この魔法球で五日前によくやく安定に持ちこめたのです。ちなみに、気絶してから現在で十日ほど経過しています」

「てことは……、外だともう朝か」

「はい」

大分と寝たなあ。

にしてもそれだけの反動とは、流石は”サウザンドマスター”が掛けた呪いだ。力任せに掛けた癖に反動は一級品を完全に通り越しているそれには感嘆の念を称する。

それだけ横になっていたせいか身体が重い。首を鳴らしながらゆっくりと身体を解して行く。

「ゴキゴキと気持ちのいい音を鳴らしながらストレッチをしていく俺を見て、二人は呆れて口を開かなかつた。どうやらもう何を言っても聞かないだろうと理解したらしい。

それは正解だ。

「寝過ぎは身体に悪いからな……」

「もう何も言うまい。茶々丸、何か摘めるものを用意してやれ」

「畏まりました」

エヴァンジェリンの言葉に従い、茶々丸は俺が進んできた道を逆走していく。

どうやらあそこが外から見えていた城の中だつたらしい。名を確かレー・ベンス・シユルト城だつたか。中世の面影を残すそれは、間違いない現代に存在するならば億の金を積むほどの価値があるだろう。清掃も行き届いており、また保存状態も高い。城に骨董価値というのも可笑しな話しだが、無理矢理そう言い表せば目が飛び出るよ

うな値段が付けられるだろ？。

「なあエヴァンジエリン」

「エヴァでいい」

「ん？」

「これからはエヴァと、そう呼べ。わかつたな、冒っ」

向けられる視線は信用ではなく信頼の光が宿る。

ああ、そうか

「ああ、これからよろしくへな、エヴァ」

友達ってこんな感じなんだろうな。

「ふう……」

溜息を付いたのは、冒やエヴァンジエリンが住まつ学園の長である麻帆羅学園学園長、近衛近右衛門である。

その溜息には一通りの意味があり、一つはこれから行われる学園行事のこと。

もう一つが謎の存在のこと。

学園行事とは麻帆羅中学の修学旅行、つまりは3・Aが関西呪術協会の総本山である京の都に親書を届けに行くことである。孫である木乃香を狙う過激派や魔術組織は未だ後を絶たず、いなければ和解出来るのだろうか。

まあその為に東西の架け橋を担つ親書を持ったネギ君に行つて貰う訳だが。

そしてもう一つの問題が謎の存在について。

これは以前に刹那君や龍宮君、それにタカミチ君から報告が上がっていた存在と同じ存在で間違いないだろ。

別にそれだけならば問題はなかつた。どうやらその謎の存在がエヴァンジェリンと親交があるらしいといつことが浮かび上がつたのだ。

何故そのようなことがわかつたかといつと、先田の大停電の時、儂は確かに見ることが出来た。

侵入者に首を絞められ呻き声を上げるエヴァンジェリンと、その窮地を救つた謎の存在。見れたのはそこまでで、強力な結界に透視の魔法は打ち消されたものじゃが。

その後の報告では、態々とエヴァンジェリンはその謎の存在のことを儂には伝えなかつた。

確かに自分の失態を伝えたくないといつ、自分の矜持を守る為の行動とも取れる。が、儂にはどうしてもそのようには思えなかつた。これでもあやつとは15年の付き合いじゃ。それなりに彼女の人になりも知つておる。そんな彼女が自分の矜持を守る為に嘘の報告をするだらうか？

「絶対にしないだらうのう……」

彼女はそういう奴じや。

それともう一つ。今まで解けなかつた呪いが少しだけ解呪出来たといつ報告じや。

彼女は前々から研究していたと言つておつたが、どうもおかしい。

どうして今になつてそのような研究が成されたといつことじや。もし時間が必要というのなら彼女が持つ魔法球に籠りっぱなしで済

む」とじゅ。

ならば最近になつてから研究し始めたことか？ それもないだろう。

もしそうなら、あの大停電の時に懲々ネギ君を襲つ必要なかつた筈じや。これも予防の為と言わればそれまでなのじやが、どうしてもそつは思えない。

ここまで証拠に近い証拠が存在しているのじや。

「謎の存在がエヴァの呪いを緩めたといじゅうなあ……」

別にエヴァの呪いを解くことに儂は異論はない。

何せ、元々三年という約束で掛けられた呪いが今の今まで継続されていたのじや。普通ならば悪いのはじりひりであつて、エヴァに向の問題もない。

「まあ正義感の強いガンドルフリー君なんかは反発するじゅうが」

ここで問題なのが、どうしてその謎の存在がエヴァの呪いを緩めたかといつ一点のみ。

これが善意なんかなれば問題ない。ただそこにもし悪意があるといつのなら

「儂は全力でそれを阻止しなくてはいけん……」

光る眼光は老いたものではなく、歴戦の戦場を潜り抜けてきた強者のもの。

「へりぬま湯に浸かるつと、その根幹は変わらない。

「鬼が出るか蛇が出るか……、出来れば」^{ハリ}側であつて欲しいもんじやな」

それほど力があるのなら、木乃香も守つて欲しいものじや。

「稚拙な物語だ、なあ？ テルティウム」

壮年の男性は何もない存在にそう問い合わせた。

普通ならば反応なんてものは返つてくる筈はない。だが

「その名前で呼ばないでくれないかい？ 僕の名前はフェイト・アーウェンルンクスだとあれほど言つているだろ？」

「ふん、名に意味を見出すなど不要だ。故に誰かわかれいいのによ、テルティウム」

「はあ……」

壮年の男性と会話する存在は、突如地面から現れる。

それは“ゲート”と呼ばれる転移魔法の一種であり、また高難度の位置に値する魔法だ。そんじょそこらの魔法使いでは到底使いこなすことの出来ない魔法を、外見だけなら若く見える少年は易々と使いこなす。

そのゲートから姿を現す少年は、第一印象を述べるなら“白”。服装から髪まで全てが白で構成される彼は人間味を感じさせず、どこか人形のような雰囲気を漂わせる。

「君はいつもそうだね、 “大いなる秘法”^{アルス・マグナ}」

「それはそうだろう？ 私は私以外の何者でもないのだから」

白髪の少年はその男性との問答に眉を顰める。

どうやらこれが毎度繰り返される会話らしい。人形染みた彼も人間臭さが現れているのは何の皮肉か。

「それで……、本当に計画を実行するのか？」

馬鹿げている、そんな表情で男性は問いかける。リスクがある訳でもない。ただそんなことをする意味を見いだせないのだ、彼は。

確かにそうだろう。

物語の内容は三文芝居のような“ありふれた理不尽”に襲われた一人の少女が“ありふれた復讐”をする為のシナリオ。

壮年の男性は無駄ということを何よりも嫌う。故にこの計画には反対なのだ。

元々、自分の欲を満たす為にこの組織に入ったというのに、未だそれを満たすことには至っていない。

面白いことや興味深いことはあった。だが、それでも足りないのだ。

「確かに君の言つ通り、この計画は無駄だよ。ただ計画は無駄だけど、意味はある」

「意味？」

「ああ。大戦期の英雄“サウザンドマスター”の息子がどれほどの脅威に成り得るかという検証さ」

少年は何か思つところがあるのか、今まで一番人間らしい表情を浮かべた。

「“英雄の息子”……」

しかし、その情報を聞いても男性の表情は変わらずに、未だ不服そうだった。

“サウザンドマスター”本人を見たことがある男性にとっては、それはあまり興味深い内容とは思えないものである。

親が優秀だから絶対的に子が優秀だろうか？ 確かに遺伝子的に言えばそれは是である確率は高い。しかし、否の可能性もあり得るし、是であろうとそれを上回る才能を持つ存在など探せば見つけることが出来るだろう。

実際に男性は見つけ、そして育て上げた。

“天賦の才”を持つ少年を。

「……好きにするといい。だが私はその計画には一切関与しない」「それは構わない。どうせ君が関わるのは本当に最後だけの予定だからね」

その場所から踵を返す男性。

残った少年は何を想う？

「扱い辛いけど、仲間だとこれほど安心出来る存在はないだろうね」

信頼？ 信用はそれなりにしているだろう。だが信頼は別問題だ。彼は絶対に、未来永劫に信頼することはないだろう。

彼は自らの渴きを満たす為ならば簡単に僕達を切り捨てる。彼はそういう人間だ。

それを理解してなお、僕が彼を組織に招き入れたのは、それを補い、それでなお在り余るほどの利が存在する他ならない。

「僕もそろそろ行こうか……」

少年もその場所から去っていく。
そこに残るものは静寂のみで、人の存在というものが消え去った。

12・京の都（前書き）

この作品は原作「ネギま！？」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

京都。

それは日本を代表する歴史的都市だ。

始まりは約1200年前、桓武天皇が784年（延暦3年）に長岡京を造営するも、天災や後述する近親者の不幸、祟りが起り、その原因を天皇の徳がない証拠であり、天子の資格がないと民衆に判断されるのを恐れ、僅か10年後の794年に四神相應の土地相より長岡京から艮方位（東北）に当たる場所に改めて平安京へ遷都したことに始まる千年の都である。

その後も鎌倉幕府、室町幕府、江戸幕府と日本の政の中枢を担う都市として、また神社や寺など宗教方面でも中枢を担う大都市として発展していったのだ。

近年では、1867年（明治12年）の大政奉還により統治権が幕府から京都の朝廷に返上されて新政府が誕生したが、それでもなお1000年の歴史は揺るがず、世界各地に存在する靈地の一つとしても名高い。

勿論、それだけの歴史を歩んできたために陽の力だけでなく陰の力も溢れかえっている。

それは遙か昔、陰陽師という存在が一般的であつた時代。鬼などが都から人攫いをするという行為を普通に信じていた時代。数多くの人間が戦争により人知れず逝つた人達の怨念。そんな陰の力も溢れかえつていたのだ。

時として、京の都を”魔都”とまで称したように。

とまあ、こんな長々と語つた訳だが

「修学旅行が京都つて……、安易すぎやしないかねえ」

眼の前に映る清水寺眺め、俺はそつ零した。

半月ほど前の修学旅行の行き先を決めるその多数決は京都とハワイが半々だった。

ハワイ側の言い分は金髪のお姉さんとお近づきなれることで、京都側は舞子さんにお近づきになれると、対極の図を示していた。勿論、討論をしていたのは男子だけであって、女子は須りく汚汚を見るかのような視線で男子の大半を捉えていた。

俺はその中でも珍しいどちらでもいい派で自分の席に着いて睡眠不足を解消していた。女子達も、あの状態になつた男子に向を言っても無駄だということを理解し、各自がお喋りをする始末。

「いや 今日中じゃ決まらないだらうなあ……

そう思つていた時期が俺にもありました。

しかし、それは裏切られる結果となり

とつて……

「満場一致で京都に決定。しかもその理由が英語が喋られないという阿保みたいな理由と、巫女さんにも出会える確率があるということ

何で俺つてこのクラスに混じつてるのか小一時間考えたくなつた出来事だった。

級友には本当に疲れさせられる。別に面白くないといつて駄でない。一緒にいればそれなりに楽しいのは間違いないからだ。

それでも

「もう少しじぶんにかならないかなあ？」

「何がだ？」

「んあ？」

金色の髪を纏う小さな少女。それに付き従う亞麻色の髪を持つ女性。

それはつい最近になって知り合った異種族の友。"真祖"と呼ばれる最上位幻想種に位置する吸血鬼こそが彼女の本性。

「何だ、エヴァ達も修学旅行は京都かよ」

「そういうそつちこそな。私としては日本文化は好きだから嬉しいが、そつちはそうでもなさそうだな?」

「別に嫌いでもないし好きでもないってのが本音だな。温泉とかは好きだけど」

「温泉ですか……、確かに今夜宿泊する旅館には露天風呂が設置されていた筈です」

「おつ、そりやゆつくり出来そうだな」

その後も何故か共に行動する二人。

元々、俺の班メンバーは疾風怒濤を体現するかのように班行動という縛りを無視して各自が好きな行動を起こした。その為に現在、班にいるのは俺一人のみ。他の班の人達が一緒に周るかという提案もあつたが、流石に他のメンバーのせいでの班に迷惑を掛けるのは悪いと思い断つた。その時の残念そうな顔には些か悪い気がしたけど。

逆にいえば、一人で伸び伸びと好きなところを巡れると解釈していたので問題なかった。

それにエヴァや茶々丸となら俺には文句などある筈がない。
何せこの二人は俺の"友"なのだから

「はあ……、いい湯だ」

露天風呂に浸かりながら身体を伸ばす。

あの後も集合時間になるまでエヴァ達と巡り、そのまま別れた。が、宿泊施設は同じ嵐山ホテル。自由時間に部屋に遊びに来いと伝えられたが、どう考へても無理だと返しておいた。部屋に他の人間がいないのならいざ知らず、お前の部屋には同じ部屋の人間がいるだろう。そう云えてやると、どうやら他の存在についてはすっかり忘れていた模様。うつかりさんめつ！

結局は妥協案として夜の街に付き合ふと御指名を受けたが。

「文面だけを見ればデートの御誘いってことを理解して言つてゐるのかねえ？」

勿論それには茶々丸も付いてくるのでデートと言うには少し可笑しいが、それでも夜の街に一緒に出歩くのはそれなりの意味が隠される。

「ま、別にいいだけだ」

どうせ就寝時間を過ぎたら寝る以外の選択肢は本来存在し得ない。ならば身代わりでも作つて遊びに行くのも一興というものの足を伸ばしながらそう結論付けた。

「夜の祇園もなかなかどうして……、風情があるな

呴いた言葉の通り、俺は夜の祇園を歩いていく。隣にはエヴァと茶々丸の二人、だけならば良かつたのだが……

「ケケケ、本当ニ風情ナンテ感ジテルノカヨ？」

「そこは茶々を入れるところじゃねえよ、ゼロ」

俺の肩の上に乗る小さな人形。

それは”真祖”と共に幾たびもの戦場を乗り越えてきた古参の強者であり、”真祖”の最初の従者。名をチャチヤゼロと言った。

普段ならば周りから変な眼で見られることが受け合いだろうが、認識阻害の魔法をゼロ本人に掛けているので一般人にはゼロの姿は知覚することは不可能。

故に俺は安心してゼロを連れまわることが出来るのだ。そうでなければ重度の変質者として通報される。

「ふん、そいつの言つことなど八割方聞き流すくらいでちょうどいいんだよ」

「オイオイ御主人。ソレハ少シ酷クネーカ？」

軽口を叩き合いながら俺達は夜の街に紛れて行く。

この年齢でこのような時間に外出すれば職質もされるだろうが、それはゼロの時同様、認識阻害の応用を使用しているので問題ない。

「それで？ 何で周りから人がいなくなつてん？ また面倒事に巻き込まれてんの、もしかして？」

「……私達は目的ではない」というより、私達が気付かずに入した形みたいだな。目的は「

眼前、と言つてもここから数百メートルは離れた場所を駆け抜け行く……猿のキグルミを着た変人。その腕には一人の少女が抱えられ、その二人を追うかのように少年と二人の少女が追いかけて行く。

その集団はこちらに全く気付かず 気配、魔力共に完全に遮断

しているので世界最強クラスでさえ見破れるかわからないが、過ぎ去つていった。

進路先から予測してみると、猿は駅の方へと向かうのか。そのまま駅で逃亡というのが計画？

「ふむ、あれは近衛木乃香と桜咲刹那、それに坊やと神楽坂明日菜か。ということはキグルミは西の過激派といふところか？」

「ケケケ、大方過激派ノ奴ラガコレ幸イとバカリ一計画シタンダロウヨ」

「ふうん……、って、あの剣士……」

後ろ姿しか見てはいないが、あれは間違いないこの前窮地を救つてやつた片割れだろ？

「何だ？ あいつと知り合いだったのか？」

訝しむような視線でこちらを見るエヴァに眉を顰めながら答える。

「別に知り合いつていうほどじゃない。この間殺されそうになつたところを助けてやつただけだよ」

「ふんつ……」

その返答に満足だつたのか不満足だつたのかはわからないが、それきりでその会話内容は途切れる。

にしても、これからどうしようか。

この人払いの結界を張つているということは、この近くに一般人はいないということと同義。ならばその範囲から外れればよいだけの話なのだが、如何せんどのまで行けばいいのか判らない。

無理矢理解除するという方法もあるのだが、それだと無駄に厄介事が舞い込んでくる可能性が高い。故にその選択は取りたくない。

かといつて無暗に時間の浪費も避けたい。
ならばどうするか？

「追いかけて行つた奴の見学でもするか？」

「……中々悪趣味だがそれも面白そうだな。坊やがあの経験でどこまで成長したか見るいい機会だらうしな。ではどうする？ 直接見に行くか？」

「そこまで踏み込む必要もないだろ。適当にこいつやって」

そうして出来るのは一つの水球。

それがまるで意思を持つてゐるかのよつて宙に浮かび飛んでいく。それと同様にもう一つの水球を作りだし、一言追加スペルを唱える。すると、その水球は占い師が扱う水晶のよつに輝き、そしてある風景を映し出す。

「物体による視覚共有のアレンジか？」

「そゆこと。これならバレることもないだらうし、もしバレたとしてもリスクは一切ないからな。後は適当に歩きながら見るだけっていづ寸法だ」

少年は立ち止まる。周りの少女も同じように。

眼の前には燃える業火が道を阻む。その先に自分の生徒である近衛木乃香を攫つたキグルミを着た女性が佇む。

足踏みは していられない。ここで歩むのを止めてしまえば攫われた少女がどのような事態に陥るかわからない。

恐怖、勿論その感情は少年の胸の内には存在した。

眼前の猛火が自分を焼き焦がす光景を幻視したのなら誰であつて

も恐怖を抱くだろう。

だが、それでも少年は進むことを選択する。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル 」

あの時の光景は今でも思い出す。一度眠りに付ければ襲いかかって来る悪夢。それはつい最近自分が感じた恐怖。

圧倒的殺氣が自分の内から蝕む、そのような感覚。足を竦ませ、ただ怯えることしか出来なかつた自分。それは悔しかつた。魔法学校を首席で卒業したといつて、本当の意味での実戦では何の活躍すら出来なかつた。

初陣があれでは無理だと言い捨てればそれで終いの出来事。だが、それでも少年は納得など出来る筈もなかつた。

自分が目指すものは皆を救い平和を齎す正義の味方。学校のいた時代、その夢は誰からも否定されることはなく、それ以上に進んで肯定された。それは確かに嬉しいことだつたのだ。

自分の夢が肯定されるということは、自分という存在が認められるということと同じだつたから。

だからこの夢をいつまでも目指していれば、自分も父と同じようにな存在になると愚かにも思つていたから。

しかし現実はそう甘くない。

あの時、あの殺氣を受けた瞬間、少年は死を予見した。実際、"真祖"である少女があの場から逃がしていなければ、その後に行われた"死闘"に巻き込まれ命を失つていただろう。それは今も共にいる少女も同じ。

幼い少年はその時に理解した。

全てを救うような正義の味方になることなど不可能だと。

論理的に考えればそうだろう。今もこうしている間に死にゆく人間がどれだけいるか。仮に多大な力を有していようと同時に二つの命など救えはしない。同じ場所ならば救える可能性もあるだろう。だが、もし違う場所ならば？ その時は選択しなくてはならない。それは命に価値を付けるということだ。

「吹け、一迅の風」

だから少年は考えを改めた。
全部を救えはしないのなら、自分の大切な人達だけでも救つてみせると。
自分の身近な、この小さな両手で抱えられる量だけは救つてみせると。

その考えを胸に刻んだ瞬間、笑みが浮かんだ。
父もこのような想いを持つていたのだろうか。そしてその想いを指針に行動し、そしていつしか”英雄”とまで称されたんだろうと理解する。

かつて敵対した吸血鬼の夢を見た時に断片ではあるが、それでも父という存在を見つけることが出来た。
あの様子から正義の味方などを思い描くことなど出来やしない。
精々がチンピラがいいとこさ。

「”風花 風塵乱舞”！」

吹き荒れる風が行く手を阻む炎を消し飛ばす。
もう迷うことなどない。

理想に憧れる偽善者はもういない。
ここにいる少年は既に戦人。^{いくさびと}信念を以て道を選択した一人の独善者。

物語の歯車はまた一つ動きを変えた。

「木乃香さんは僕の生徒で大事な友達です！」

少年は駆けだした。

それに同調するかのように動き始める少女たち。

「大切な存在を傷つける人には容赦はしませんッ！」

13・修学旅行（前書き）

この作品は原作「ネギま！？」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

水球に映った戦いを見てエヴァーは感嘆とした表情で呟く。

「少しは成長したようじゃないか……」

紅蓮の髪を靡かせる少年を姿を瞳に収める。

それは彼の英雄の息子。荒削りの魔力運用だが、その身に宿す魔力総量は一般的の魔法使いに追随を許さない。また、それを扱う才能も十分すぎるほどだろう。

実際にあれほどの業火を風花 風塵乱舞で消し飛ばすにはそれだけ多くの魔力を喰い、またそれを制御するだけの才能も必要になつてくる。

だが少年はそれを見事に成し遂げ、そして目的である攫われた少女を救出することが出来た。

しかし、一つだけ疑問が残る。

少年 ネギ・スプリングフィールドは魔法使い。大太刀を持つ少女は太刀筋や技を見る限りでは神鳴流の剣士だろう。この二人が戦えることは理解出来る。どちらも元を正せば戦乱の地に身を置く存在達だ。

だが、もう一人の少女はどうだ？

足の運びやその身に纏う雰囲気は一般人のそれであるし、またアーティファクトを持つていてことから少年の従者であることは理解出来るが、そのアーティファクトを見た瞬間に驚いたことから推測するに、間違いなく彼女は一般人の筈。

それなのに、どうして彼女はこのよつな場所に居る？ 明らかに場違いにも程がある。

「どうかしたのか？」

「あの剣士じゃない方の女子の名前つて判るか？」

「何だ、気になるのか？」

何処となくイラついてるような雰囲気を漂わせるエヴァ。その様子にオロオロとする茶々丸とケケケと笑い続けるゼロの二人。

俺が何かしたのか？

「いや、何で一般人がこんな戦場に身を置いてるのかちょっと気になったからな」

「……大方、坊やの従者だからという安易な考えしか持つてないんじゃないのか？」

「それだけで態々こんな血生臭い場所に進んで歩み寄るか？」

俺だつたら絶対にそんなことはしないし、したくもない。

「そう言えば……」

ふと思いついたようにエヴァは声に出す。

「あいつは私の障壁を問答無用で破壊してきたな」

「お前の障壁を？ 封印時のか？」

「ああ、封印時もそうだが、一時的に解放されていた停電時も同じように破壊された。あれは破壊されたというより……無効化？ 破壊された感じではなく、障壁そのものを消し去られたという感じだ

つた

「完全魔法無効化か？ でもあれは超が付くほどのレアスキルだろ

う？ そんなもんをこんな極東の辺境の地の生まれの人間が

「だが、実際にあいつはそれに似た現象を引き起こしている。それがあいつの寮の同居人は攫われた張本人である近衛木乃香だ。あい

つも魔法のまの字も知らない人間だが、その身に宿す魔力は極東一。
しかもじじいの孫という特別な存在の近くに平凡な人間を態々選んで置いておくか？ そんな危険に巻き込まれる可能性にある存在ならば何かしら力を持つ人間を置くのが普通だらう？

「それも一理ある、か……」

水球から少年少女たちの姿は消える。それと同時に役目を終えた水球も消え去り、水は水蒸気と化し一切の証拠も屠られる。

何時の間にかに俺達も日常へと戻つて来た。

辺りには人が賑わい、夜の祇園を活氣づける。

「ま、今なこと気にして仕方ないし、別に俺に関係する訳じゃないからどうでもいいか」

結局の所、そんな結論に至る。

それを見たエヴァは呆れた視線を寄越すが気にしない。

だつてそうだらう？ 自分に関係するのならばもう少し真面目に考えもあるが、結局の所、自分に関係することなど何一つない。

ならばいくら考えても無駄にしかならない。だつたらそんな思考に割く時間を他のことに割り当てる方がよっぽど効率がよい。

「んじゃ、そろそろ帰ろうぜ？ 今から帰つたら零時を超える頃には部屋に着くだろ。それにあんまり遅過ぎても明日がキツイしな」

「それもそうか」

そうして俺達三人+人形一つは帰路に着く。

勿論、明日も一緒に周る約束はさせられましたが。

「まあ予測してたけどさ……」

修学旅行一日目の中の日程はどの学年クラス共に奈良公園。というより、麻帆良学園の修学旅行は基本的に行く場所や時間を合わせるらしい。その方が楽だと担任は愚痴を零してた。

でも、改めて考えるとそちらの方が面倒臭いのではないかと思う。人数が少ないのでならその方法もアリだろうが、今この場所にいるクラス数は8、つまり一学年丸々訪れているのと同じという訳だ。その人数全ての手綱を教師は持たないといけないというのは些か辛い。比較的大人しいクラスならば問題ないだろう。

しかし、しかしだ。この京都には中学3年の問題児クラスが二つも訪れている。

まず一つ目がエヴァ達が組み込まれている麻帆良女子3・A。もう一つが俺のクラスである麻帆良共学3・Aである。どちらもAクラスというのは何の関係もない……筈だ。

どちらのクラスにも共通することが”常に騒がしい”ということだ。

女子の方は女子特有の、男子の方は男子特有の騒がしさが存在する。

「あいつら……、巫女さんを拝みに行くんじゃなかつたのか？」

同じ班メンバーの級友の姿が脳裏に蘇る。

朝早くから鼻息荒く語る馬鹿共。熱弁するその姿にはどこかカリスマ的なものを感じたのは一生の不覚だろうか。

だが、内容が内容だった。

『巫女さん！？ んな幻想に縋りつくなんて俺達は一切しない！』

『俺達が今目指すべきものは何だ！？』

・ 麻帆女の人間であります 大佐！

そんな演説が飯時に行われていた。

勿論、クラス内の女子は冷めた視線を送り、担任教師は笑って無視。他クラスの生徒は「またコイツらかよ……」との視線を送るに留まり、俺は溜息を吐いた。

「昨日と同じく、班行動が始まった瞬間にドロンと消え去りやがつて……」

もうあいつら忍者と言われても俺は疑わない。

何なごて俺が見て迺シニとしか出来ないほどの速度で駆けて行くからな、あいつら。

まあ今更そんなことを言つても遅いだけだし無駄なのは理解して
いるや。

どうちにしろ俺はエヴァ達と行動する予定だから別れることにならぬし、それを考えれば妙な勘織りをされないだけマシと言つもの。

一人ブラブラ歩きながら集合場所を目指す。

京都に来たと言ふに奈良公園といふのはしゃがむ
の場所を選ばなかつたのか。

「時間通りとは……。感心するぞ、昌

「お前は俺が遅れて来るような奴とでも思ってたのか？」

奈良公園の入り口に佇む吸血鬼。

今更だけど、吸血鬼が御寺や神社を参拝するつてどうなんだろうか。まだ教会とかじゃないだけ許容範囲か？

いや、そもそも吸血鬼が神の敵つていうイメージが駄目なんだろうか。

別に吸血鬼が敬虔なクリスチヤンだとしても問題ない筈だ、多分。

「いや、まあ多少は遅れてくるだろ」と予測していたんだがな。男は女より時間にルーズなのは古来から変わりないものさ」

流石は600年という悠久の時を生き抜いてただけあって、言葉一つとってもその重みというものを感じさせられる。

「ならば俺は変わり種といつとこるか？」

「違いない。お前ほど変わってる人間などそうそう居ないさ」

「……真正面から変人と言われて喜ぶような高等な趣味は持ち合わせていないぞ？」

「だが、自分が一般から逸脱している」とくらいは理解しているだろ？

「うう？」

そう言われてしまえば俺に言い返す言葉など存在しない。

既に俺は”狂っている”、いやこの世に生を受けた瞬間から”狂つていた”のかもしれない。

そのことを明確に理解したのはいつ頃だっただろうか。多分あの”糞野郎”に出会つてからだろ？。あいつ出会い、そして初めて理解することが出来た。

自分は最高に、そして最悪に狂つてゐるということを。

「そうだな、俺も世界中に存在するしがない狂人の一人だろよ」

「狂人は自分が狂人であるということを理解出来ない。それは自分

が“異常”ではなく“正常”と、そして周りが“正常”ではなく“異常”だと認識しているからだ。故に自分のことを真正面から狂人だと認め、それでなお理性を残すお前はしがない存在だと私は到底思えないぞ？」

その瞳映る光は嘲り？ それとも憧憬？

正義と悪、光と闇、正と負のような本来ならば対極にあるそれらが同時に宿る。

「“理性ある狂人”ほど狂つていて、それでいて物事の本質を理解する厄介な存在はそれ以外にあるまい。事実、“理性ある狂人”と称される存在は得てして何かしらの強大な力を持つ。“第六天魔王”織田信長然り、“ユダヤ殺し”アドルフ・ヒトラー然り、な「俺は教科書に載るほど有名な人物ほど高尚な存在じやないさ」「はつ、どうだが。“失われた技術”を易々と使いこなす存在が教科書に載らないとでも思つてゐるのか？ 本国で発表すれば一躍有名人だよ」

「態々自分の手札を見せびらかす阿保もいないだろ、流石に」

取りとめのない会話（取りとめのない？）を続けながら俺達一人は歩みを進める。

昨日まで一緒に行動していた茶々丸はどうやら班のメンバーと行動しているらしい。ゼロはその付き添い。

ならばお前はどうなんだ、と問いかけると私は問題ないとのこと。別に俺に厄介が掛かる訳でもないので気にはしないがね。それで班のメンバーが納得しているのなら。

奈良公園に入場すればまず眼に入るのが鹿の存在。

パンフレットによれば約1200頭の鹿がこの奈良公園、広さにすれば660ヘクタール（東西約4キロメートル、南北約2キロメ

ートル）の中を我が物顔で闊歩し観光に来た客から餌を強請るらしい。また、この奈良公園は堀・柵・門などがなく入園料も不要なのでどこからでも、いつでも365日、24時間散策することが出来ることで有名であり、日本を代表する観光地の一つである。

そんなパンフレットの内容を流し読み、そして懐に丁寧に折り畳んで直し込む。

格別俺は奈良公園が好きだということでも、奈良が好きだということでもない。だから別にこのような情報も必要ないということだ。精々鹿が沢山放牧されているのと、結構な広さを持っているということくらいを頭の片隅に置いておくだけでいい。

横に居るエヴァはそんな俺からすれば全く価値を見出すことの出来ない場所で幼子のように顔に笑顔を灯しハシャイでいる。

話を聞けば15年の間、ずっとあの麻帆良学園から牢獄に閉じ込められていよいよ抜け出せなかつた。そんな実情を知っているからか、俺はエヴァを揶揄したりする気は全く起きない。それどころか、そんなエヴァの様子が微笑ましく、温かい笑みを以て彼女を優しく見守つっていた。

精神は肉体に引っ張られる。

そんな俗説を立てた哲学者が居たが、それは間違つてなく、限りなく正しい学説だろう。

実際、俺の横に佇むエヴァンジエリン・アナタシア・キティ・マグダウエルは600年という悠久の歳月を生きた吸血鬼だ。普通の人間には600年という年月の重みはどれほどのものか想像することすら難しく、ただ漠然と「とても長い」くらいの感想しか持てない。かくいう俺もそれがどれだけ辛く、激しい日常だったかは想像することは難しい。

エヴァが言うように、確かに俺は一般の魔法使いならば一生を賭けても辿り着けないような魔の頂に到達してはいる。だが、到達し

ているだけであって、生き抜くといつ一点のみに絞れば俺はエヴァからすれば赤子に等しい。

そんな存在がどうしてその重みを理解することが出来ようか。もしそれを理解出来るという存在がいるならば、その存在が嘘を付いているか、エヴァと同様にそれだけの歳月を生きてきたかの一択に過ぎない。

少し話しが逸れたので本題に戻そう。

今ここで俺が語っている本題というものは“精神は肉体に引っ張られる”ということだ。

エヴァは600年と歳月を歩んできた。それを普通に考えれば600歳という年齢であり、またそれだけの人生経験もあつたということ。それから考えれば、本来ならばエヴァの性格はもっと老成していたり、達観していたりしていいと可笑しい筈なのだ。

600年の十分の一の60年生きた人間でさえそのような性格がいるというのに、どうしてそれの十倍以上を生きたエヴァはそうにはなっていないのか。

それが本題の中心である“精神は肉体に引っ張られる”ということだ。

いくら歳月を積み重ねようと、成長しない身体を持つていても、エヴァの精神は成長することはあり得ない。価値感などは変わるかもしれないし、胆力なども付くだろう。

しかし精神の根幹の部分はどう足搔いても成長することはないのだ。

結局何が言いたいかと言えば

ヒツアセナホリモニトニハ一體ヒテモルノンダナゾ。

14 少しの勇気（前書き）

この作品は原作「ネギま！？」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

14・少しの勇気

自分より小さい子供ながら、自分より遙か上の人生を歩む少年。
内気な私と夢に向かう少年。

生徒である私と、教師である少年。

そんなのが、私とネギ先生との関係だ。

修学旅行の一日至、昼食の最中、クラスの皆の眼の前で自由行動の時間をネギ先生と周るのを誘うのは本当に緊張したが、その甲斐もあって今は一人つきりで奈良公園を散策している。

本当に一人の親友には感謝をしてもしきれない。

こんな内気で何も自己主張出来ない私を親友と告げてくれた一人。困っている時はいつでもどこでも助けてくれる一人。今日だつて自由行動を誘えた時には自分のことのように喜んでくれ、そして機を見計らつてそつと私とネギ先生だけを孤立させてくれた。

それは本当に嬉しかった。
でも

「（告白しきだなんて、どうどうどうやつて……）」

別れる寸前にそのアドバイスを貰い、現在進行形で私はテンパつていた。

「（確かに私はネギ先生のことが好きだけど……）」

そう、好きというこの感情は嘘ではない。
誰が何と言おうと、この感情は本物なのだ。

自分より三つも四つも年齢は下であるが、彼の瞳に宿る光は本物

だつた。純粹に、直向きに何かを追いかけ、そして何かを成し遂げようとする、そんな光。

それに私は惹かれ憧れたのだ。

今までそういう光をみたことは何度かあつた。

それでもあれほど煌いていた光は嘗て見たことがあつただろうか。

「（初めて出会つたあの日から、私は惹かれてたんだ……。でも

）

その光の質はある日を境に変わつた。

それを是と取るか否と取るかは人それぞれだろうが、私は変わつた光に一層惹かれて行つた。

前までのネギ先生はよく言えば純粹な子供だつた。

どんな夢でもいつか努力すれば必ず叶うと信じていた純粹な少年。それはそれで良かつた。時折見せる大人びた表情と相まって、年齢以上の雰囲気を漂わせていた。

だが、今の瞳の光は違つ。

学の無い私が頑張つて例えれば、それは純粹な少年が現実という壁にぶつかり、それでも如何にかしてその壁を乗り越えようとする、そんな強い意志を見せる光になつっていたのだ。

どんな問題にぶつかつたのか、本当に問題にぶつかつたのかは私にはわからない。

それでもその光の質が変わつた事だけは私には理解出来た。

「（告白）」

そつと横目でネギ先生の方を盗み見る。

純粹な笑みを浮かべるその笑顔。その本質は今は鳴りを潜め、奥深くで光はネギ先生を灯し続ける。

その笑顔がこんな臆病な私にいつも勇気を与えてくれた

「先生っ！」

だから、私は決心しよう。

それが例え先生に対する重みにしかならずとも、この想い（きもち）だけは告げておきたい。

誰でもない、私だけの気持ち（おもい）。

「はい、何ですか？」

振り向く貴方はいつもような笑顔。

貴方がいくら変わらつと、根幹は変わつていない。

「私」

そんな貴方が

「　　出会った日からずっと好きでした。私、ネギ先生のことが大好きですっ！」

少女の言葉が青空の下に響き、そして時は止まった。

少年は勿論のこと、出歯龜をしていた少女二人に、言つた本人の親友である一人の少女達は放たれた言葉の意味をすぐには理解出来なかつた。

親友である一人も、自分達は確かにそのようなアドバイスを彼女に掛けたが、内気である彼女がまさか告白するだろうとは思いもしていなかつた。

唯一その中で色を持つ存在は、爆弾発言を叩きこんだ少女本人のみ。

一刻一刻と過ぎ往く時間は無限ではなく有限でしかない。

しかし、ここで漸く少年は自分に告げられた想いを理解するに至る。

ゆつくりと自分の内に染み込んでいくその温かな想い。それを少年は感じた。

それは表面的なものではなく、もっと内面的なもの。自分を”英雄の息子”という偶像ではなく”ネギ・スプリングフィールド”という個で見てくれているという、日本に渡るまでは滅多に向けられることなかつた感情。

じつらに来るまで、そのような感情を向けてくれる人はごく少数でしかなかつた。

そして、今でも以前と同じように生きている人間はたつたの二人。自分の従姉と大切な幼馴染。たつた二人だけになってしまつていた。それを少し前の自分は理解していなかつたことは本当に恥ずかしい。一度理解してしまえば一生忘れることはないだろう。

だが、あの時までは本当に気付きもしなかつた。

自分をちゃんと個人として見て貰えるということはこれほども嬉しいことだ。

奇しくも、それは生と死の狭間に生身で放り込まれ、それでようやく理解することが出来た。

それは幸せなことだろう。

向けられる感情の本当の意味を知ることは中々に難しい。

「えっと……」

だからそれに答えなければいけない。
それが少年がすべき行動であり、使命なのだから。

だが、ここで頭に置いておかなければならないことは、少年は未だ10という幼児であるということだ。
いくら魔法の修行で教師をしていると言えど、中身はまだまだこの世を知り始めた赤子同然。

そんな人生経験も積んでいない若造が咄嗟に返事をすることなど不可能に近い所業なのだ。

だから少年は声にならない音を上げる。

その姿からは必死が見られ、先生から「『えられた問題を必死で解こうとしている生徒に似ていた。

故に少女も少年の言葉をゆっくりと待つ。その姿は普段の自分に似ていたから。

すうー、と一度大きく深呼吸をする。

全身に酸素を行き渡らせ、極度に緊張状態の筋肉を解す。不足がちだつた酸素を脳にも運び、停滞気味の思考を回転させる。

少年は口にすべき答えは既に持つている。故に後は口に出すだけ。力チカチと歯が鳴る事などない。声も震わせない。それが彼女に対する敬意の示し方。

自分が持てる最大限の感謝を込め、万感の思いをその言葉に乗せ彼女に送る。

「 ありがとうございます、富崎さん」

「 え？」

「今までここまで真正面から、そして僕個人に対して想いを告げられたことは初めてでした」

その言葉から感じられる感情は 拒絶。

世間一般の人から見れば、この返事は拒否だと思つてしまつだろう。実際に少女もそう思い、目尻に涙が溜まつていく。

それもそうだろう。自分が好意を抱いている存在から拒絶されば、普通は傷つぐ。

しかし

「ですが、僕はまだ誰かを”LOVE”になるというのがよくわからんないです」

「つ……」

「”LIKE”なら確かに僕にも理解出来ますし、その感情なら僕も富崎さんは”LIKE”です。ですが富崎さんの”好き”はそうではないでしょ?」

「……はい」

結局はそうなのだ。

少年は未だ10という歳月しか生きていなく、また普通なら受けたであろう親の愛情というものを知らずに育つてきた。

唯一それに近い感情を向けてくれたのが従姉であるネカネ・スプリングフィールドだけであつて、それも愛情というなの親愛の情。たつた一人の存在を愛するという愛情とは全く違つた情なのだ。

「だから今はちゃんとした返事をする」とは出来ません

「……」

「ですが

「

だが、少年は答える。

それは誰かに頼る事でもなく、また誰かの答えを借りた訳でもない。
歴とした自分で考えた、自分だけの言葉。

「友達から……、お友達から始めませんか？」

「あつ……」

「いつか僕が大きくなつて、富崎さんが卒業して、その頃まで僕を”好き”でいてくれたのなら、その時に改めて返事をします。それでどうでしょうか？」

少女が万感の思いを込めて送った言葉に返つて来たものは、それと同じように万感の思いが込められた言葉。

それを感じることが出来るからこそ、少女は笑みを浮かべた。

「はいっ！」

絆は深まり、そしてまた縁も強まつた。

出歯龜をしていた少女達は皆似たような安堵の表情で息を吐き、大きな勇気を示した少女に心中で喝采を送る。

しかし、その一件の裏で渦巻く感情もまた存在していた。

橙色の髪をツインテールにした少女は自分でも理解出来ない感情の渦に困惑し、その隣にいる漆黒の髪を持つ少女は、自分にはない勇気を持つ少女に気付かない内に嫉妬していた。

「くちびる争奪！？ 修学旅行でネギ先生とラブラブキッス大作戦？、スタート！」

人が寝静まる暗闇が辺りを覆う中、ある場所ではそんなものは関係ないと言わんばかりに盛り上がっていた。

その主犯は予想容易いもので、やはりと言つべきか麻帆良女子3

-Aの生徒達だった。

各々の手に装備されているのは、旅館の人間が宿泊してくれる人に気持ち良く寝て貰う為に綺麗に洗濯された枕。皺一つなかつてであろうそれは今は無残にも握りしめられ、柔らかかった感触など当の昔に消え失せてしまつていてる。

そこまでして彼女達が求めるものは、主催者である女生徒が口火を切つた通り、彼女達の担任であるネギ・スプリングフィールドとのキス。言いかえれば接吻とも言つ。

「今日は班&個人の連勝複式トトカルチョも実施するよー」

それに参加しているのは一人ペアが六班の計十二人であり、他の生徒達は各部屋に設置されたテレビによる生中継を視聴し、それと同時に誰が勝つかの賭けまでもしていた。

一般人が見れば目を疑うような光景だろうが、生憎とこのクラスは平凡から最も遠いクラスであるし、またこのくらいのことは日常茶飯事で行われている。

故に生徒達の中にこの状況を疑問に思つものはいなく、またこの行動を見ている存在は他には居ない。

「全くウチのクラスはアホばかりなんですから……。折角のどかが勇気を出して告白したというのに」

参加者の中には、つい数時間前に親友の告白を出歯龜していた生徒の姿もあつた。

その存在が参加していると言つことは勿論

「でもでも～、一応これはゲームだから私達が口出し出来る」とじやないし……」

天下の往来、それも真昼間という時間帯に告白をした生徒も参加している。

「のどかは甘いですよ。本当ならこのような企画など中止にまで持つていかなくてはいけないのです」

「ゆ、ゆえ……」

「……まあ私も主催があのパパラッチとこうことで無理だつとほ思つていましたが。だからこそ、私達がネギ先生の唇を守らなくてはいけないのですよ」

夕映と呼ばれた少女は握り拳を作り決意を顕わにする。

「この一人の目的は主催された目的とは180°。違つたもので、キスをさせないとこうもの。

「私達が行える対処法は限られています。相手方にはバカレンジャーの一人がいますから真正面からやり合つても負けは必死。故に私達が出来ることと言えば、このような馬鹿げた企画が行われているネギ先生に伝えることです。勿論、新田先生などでも良いのですが……」

「口をくじもららせる。

「……下手に新田先生などに遭遇すると問答無用で正座が待つていいそですし、クラス内からも恨まれることは確実。出来れば双方被害がないネギ先生がベストというわけですね」

何だかんだ言つても、少女はどこまで行つても少女でしかなかつたようだ。

そしてこの企画の商品に勝手にされた件の少年は

右手に持つのは筆であり、左手に持つのは何かの紙。
紙は真っ白のままで、唯一形だけが人型に切られている。
これは日本の陰陽術士が扱う身代わりの符と呼ばれるもので、先ほど自分の生徒であり、また共に大切な人を守ろうと約束した人から譲り受けたものだ。

少年自身は陰陽術はおろか、東洋の魔法についてはさっぱりで、知識すらとじへ、ましてや普通ならば使える筈もない。

しかし、この符は簡易版のものであり、魔力、または氣を持つものならば誰でも扱えるというものなのである。だから少年も普通ならば使えない符を手渡されたのだった。

一度息を吸い、そのまま息を止める。その止めている間に手に持つ筆でさらさらと自分の名前を符に書き込む。

古来より、名が持つ力は絶大で、本当の名前　　真名を抑えられれば、身体や精神全てを支配されるとまで言われた。

それは古典の世界の”知る”という言葉が”支配する”という意味を持つていたのが示しており、習慣もそれを証明している。

実際、現在の日本に現存する陰陽術の中には、相手の名前を呪いの中心に置き、そのまま全身へと効力を行き渡らせ、そのまま殺すという禁呪までも存在している。相手の髪や爪などではそこまで強力なものを掛けることは不可能で、これからも名前というものがどうほど重要なものが理解出来るだらう。

話は逸れたので本題に戻す。

「ここので重要なのは、その者が持つ名とはその者にとってとても重要な役割を担う。

それは名がその者を表すというのと同義といつこと。それは“名は体を表す”という言葉まで作られたほどなのだ。

少年が本来使えない筈の符を使える理由もここから来る。

本来ならば使えない筈のそれだが、符に自分の名 真名を刻むということとは、魔術的、陰陽術的に言えば、それ即ち符に自分を刻むということなのだ。

元々式神をいつでも召喚できるようにした状態で保管し、その状況に応じて使い手の情報を刻む。すればその符が使い手の情報を符から読み取り、それを顕現させるというのがこの符の役割である。

簡略に説明すれば、符はPICOであり、名はソフト。PICOほどのようなソフトも読み込むことが出来るが、ソフトは種類によって中身は違う、それと同じようなものだ。

「これでいいのかな？」

書き終わり数瞬の後、自分そつくりの身代りが生み出される。

瓜二つ、とまでは流石に行かない。良く見知った人が注視してようやくわかるという程度であるが、それでも微量の差異は見受けられた。

だが、それでも特に問題はない。

この身代わりに仮せる命令は自分の代わりに布団の中で静かに眠つていて貰うこと、誰か来ても寝た振りをして無視すること、それでも無理やり起こしてきた場合は無理せず消滅することの二点のみ。これならば違和感を持たれる前に証拠を隠滅出来る。

問題なのが隠滅することではあるが、今現在の情勢から顧みるに、それは眼を瞑つてスルーというものだ。

「それじゃ行つてくれるね」

少年は窓に手を掛け、そのまま夜の空へと身を投げた。
少年と少女達の長い夜はまだまだ明けない

15・根本の原因といつか諸悪の根源（前書き）

この作品は原作「ネギま！？」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

15・根本の原因といつか諸悪の根源

旅館を覆うように発動されている魔法結界は、外敵の侵入を察知したり阻むようなものではなく、ある一つの“バス”を繋ぐものだ。だが、まず念頭に置いてほしいことは“旅館”には“裏の存在”などはおらず、いるのはただの“一般人”。

それだと言うのに、何故この場所にこのような結界が張られているのか。

確かに偶然、それも天文学的な確率で、一般人が周りにある生活用品や少しだけ魔力の籠つた道具を適当に並べても発動することはするだろ？ だが、それでも発動することは天文学的確率。そんな偶然で発動されると考えるより人為的に発動されたと考える方が妥当である。

実際、この結界を張つたのは英雄の息子に付き従つオゴジヨ妖精であり、それを助長したのがこの旅館に宿泊している女子中学生の“一般人”だった。

「さあどうなるかにやー？」

「どうだらうな。素材は極上だから仮契約バグティオさえ結べればこいつらのもんさー！」

小さな部屋の中に一人と一匹。

手元には小型のノートパソコンが置かれ、画面にはこの旅館の監視カメラの映像がハツキングされ映し出されていた。

そこにいたオゴジヨ妖精は一般人の前だと言うのにあつさりと言葉を話す。そんなありえない現象を直に目撃している女性生徒なのだが、それすらも納得した表情には理由があった。

その理由は甚く簡単であり、女子生徒が英雄の息子の放つた魔法

を目撃したからだ。

車道を走る一般乗車。その車道を横切るひとゆつくりと歩む子猫。そしてそれを目撃した英雄の息子である少年。思考出来る時間は限られる。助けるか、否か。

「ツ　　！」

刹那の後、選んだ答えは助けるということだった。しかし、公に魔法を使うことはマズいといふことは既に理解していた。

昔の少年ならばこの場で使っていたらどうが、今の少年は現実の壁にぶち当たり、そしてそこから歩みを進め成長している。

勿論、一般常識から”表の世界”での魔法を使った場合での危険性。一般人から見る魔法という存在の反応等々。昔は少年の内に存在していなかつた知識も今では学習し、保有している。

故に扱える魔法は限られてくる。一般人が目撃しても納得出来るクラスものだけ。

本当ならそれを踏まえて、尚且つ認識阻害の魔法を掛けるべきなのだが、如何せんそこまでしている時間が少年にはなかつた。

過ぎ去つた時間が数秒というといふ、少年の腕には子猫が抱えられ、車道を走つていた一般乗用車は何事もなかつたように通り過ぎ去つていく。

本当なら何も問題はなかつた。

一般乗用車の運転手も一瞬眼の前に黒い影が走つたかと錯覚するだけであつた筈なのだ。

しかし、例外というのも存在する。

遠方からその様子を目撃していた少女が一人。

しかも不運なことに、その少女はパパラッチ。そして不運というものは重なるものだ。

いくら少女がパパラッチだつたとしても、先ほどの少年のような動きと似たようなことが出来る存在を知っていた。それ故に少女が追及しようとも受け流せる 箕だつた。

「流石は兄貴！ あの一瞬で風属性の速度加速魔法を付与とは！」

「こらカモ君！ こんなところで魔法なんて言っちゃ駄目でしょ！ どこに一般人の人がいるかわからないんだから」

「大丈夫ですよ！ もし兄貴の姿を見てたとしても、オリンピック選手顔負けの少年だなあって思うだけの箕ですし」

少年の肩に乗っていたオゴジヨ妖精はそのようなことを話す。

それが麻帆良学園内部なら確かに一般人はそのような思いを抱くだろう。しかし、それは学園を覆うように強力な認識阻害の結界が張られているからであり、今この場所にはそのようなものは存在しない。だから今ここで先ほどの少年の動きを一般人が目撃したのなら、それは間違いなく疑問が胸の内に宿る。

それと相乗として、一般世界にはオゴジヨが喋るなどということはありえない話なのだ。

それをもし目撃した人間が存在したのなら？ それは間違いなく波乱を呼ぶだろう。

そして、実際ここに大きな波乱を呼び込む人間が存在したのだった。

「はあ～……」

旅館に設営されている露天風呂で一日の疲れを癒す少年。その姿はまるで会社帰りのサラリーマンのようで、些か年齢と釣り合っていないものであった。ぐいっと身体を伸ばすと、緊張していた筋肉がゆっくりと解れていく。

この露天風呂は数人で入るような小さなものではなく、大人数で入ることを旨とされて作られたものなのか、一般的な露天風呂に比べると広さが見立つ。

その為、同じ露天風呂内でも少し離れれば湯気で相手の顔が見えなくなるほどだ。

今この場所で浸かっているのは少年と相棒であるオゴジヨ妖精のみ。本来ならペットの入浴は禁止なのだがバレなければ問題ない。一応の保険の為に出入り口が見渡せる場所に陣取つて浸かっているが、現在は教師だけが入れる時間帯であるし、また男性教師人は少年を除き全員が入浴を済ませている為、少年以外の人間が入つて来ることなどあり得ない。

その油断がいけなかつた。

序に連日の疲労もあり、少しうつらうつらしていたところにガラツと扉が開くを聞き逃す。

何か聞こえたような気がした時には遅かつた。

「あら、ネギ先生」
「し、しずな先生つ！？ ど、どうしてここに！？ ここは男湯ですよつ！？」

入つて来たのは少年の同僚である女性教師。

「今日もお疲れ様。お背中流しましょつか？」

「い、いえその結構ですので……」

いきなりのことで平常心を失うが、それでも冷静に返す。

だが、よくよく考えてみれば可笑しな話だ。

少年が知る教師、源しづなという女性は知慮深く、また思慮深い。それなのにこのような公共の場所で愚の様な行いをするだろうか。確かにこの露天風呂が混浴ならば別に問題なかつただろう。しかし、この露天風呂は男湯。つまりは女性禁制なのだ。

今のご時世、男性が女湯に入れば犯罪なのは当たり前であるが、反対に女性が男湯に入つても犯罪になる。それが犯罪となつて公に露見しない理由は単に誰にも損がないからだ。

男性が女湯に入れば、それはセクシャルハラスメントとして女性側は訴えるだろう。しかし反対の場合、男性は訴えるだろうか？殆どの男性はラッキーくらいとしか思わず、訴えることなどしないだろう。

だが、それは訴えないというだけであり、本質的には犯罪なのだ。そんな愚を源しづなという人間は冒すだろうか？

少年は結論を出した。

だが、それを口にする前に眼の前の女性は少年の度肝を抜くような言葉を言い放つ。

「……うふふ、実はね、ネギ先生。あなたの秘密を知つてしまつたの」

「えつ！？」

「あなた”魔法使い”でしょう

驚きを声に出してしまったのに女性に見えない位置で少年は眉を
顰めた。

眼の前の女性が源しづな本人であるなしである前に、もつと厄介
なものを持って来られた。

「そこに居るフェレット君が喋っていたところを見ちゃったの」

「……」

「そこでお願いっ！ 私に魔法を見せてくれないかしら？」

少年は疲れた身体に鞭を打ち、この場を切り抜ける為に思考を開
させていく。

「こちらが切れるカードは数少なく、あちらは既に切り札を切つて
いる状態だ。場としての有利不利はあちらに分がある。何せこちら
が知られたくない情報を既に知られ、そしてそれを切つているから。
しかし、それはもうあちらには後がないと言つとの同義。こちら
がどうにかしてあちらの切り札を避けられればこちらに流れは一氣
に傾く。」

「ねえ～～ん、ネギ君見せて～～

「あぶるも、つ」

何故か女性は少年を自身の胸へと抱え込む。
だが、その行為がいけなかつた。少年は源しづな本人によくその
ような行動をされている。
故に

「 貴方、やはりしづな先生ではありませんね？」
「えつ？」

呆然としているところに追撃を浴びせる。

「源しづなという女性はもつと慎み深い女性です。確かに僕を子供扱いする時もありますが、それは飽く迄平常時のみで、仕事中などは一切の私事を持ち込まないんです」

「わ、私は」

「それに」

一拍開けて、最後の言葉を言い放った。

「しづな先生の胸はもつと大きいですよ?」

「え、?」

「容姿はそつくりでも身体付きまでは変えられなかつたのが貴方の敗因です」

「クツ、これでもクラスN0.4つて言つのこつ! しづな先生は化物かつ!?」

「クラスN0.4!? だ、誰ですか貴方は!?」

女性は自分の顔に手を持つていき、そのまま顔を剥がす。
そこから現れた新たな顔は少年自身も見知った容姿。

「バレたんなら仕方がない! ある時は巨乳教師、またある時は突撃リポーター! その正体は3-A、3番。朝倉和美よつ!」

「マズいバレてるぜ! 記憶を消しちまえつ!」

「そ、それは」

「おおつと待つた一つ! この携帯が見えないの!?. 下手な動きはしないで。この送信ボタンをポチッと押せば、その瞬間ネギ先生の全ての秘密が私のホームページから全世界に流れることになるから気を付けてね」

「つ……」

まさかここまで面倒な相手に知られるとは少年は思つてもいなかつた。

あの場にオコジヨ妖精を連れて行つたのが少年の敗因だつたのだ。少年は既に意識改革を成したが、オコジヨ妖精は依然と変わらず、前と同じまま自分の欲望に忠実な獣でしかない。そのことを少年は未だに気付いていなかつた。

「……どうしてこのようなことを？」

「フフッ、全ては大スクープの為よ。悪いけどネギ先生、私の世界的な野望の為に協力して貰うよ

「や、野望ですか……？」

困惑した少年はそう聞き返す。

それを少女は意氣揚々に返した。まるでそうして欲しかつたように。

「その通り！ 魔法使いが実在すると知つたら世間は大注目！ 私の独占インタビュー記事で新聞雑誌で引っ張りダコに！ 人気の出たネギ先生は私のプロデュースでTVドラマ化&ノベライズ化！ さらにハリウッドで映画化して世界に進出よ つ！」

そう興奮して少年に言い放つたその瞬間、少年は今までから考えてみれば驚く行動に出た。

少女が意気揚々に話しているその瞬間、注意がこちらに向き、注意散漫になつた左手に持つ携帯電話に微量の風の刃、それも無詠唱の域まで届かないほどの弱い風を携帯電話に向かつて放つた。

いくら微量と言つても刃は刃。見事に少女が手に持つ携帯電話を真つ二つに粉砕する。

「あ、……」

「すいません、朝倉さん。本当ならこのような物理的な手段を使いたくはなかったのですが、こちらもやむをえない状況だったのですわせて頂きました。これで証拠は無くなりましたね？」

「ちょっ！？」

少女の不運は重なり続ける。

ガラツという音が露天風呂に鳴り響き、そのまま数多くの女生徒がそこに入つて来る。その生徒達は少女と同じ3-Aメンバー。つまり

「ネギ君！？ それに朝倉さん！？」

「あっ、いやっ、これは」

そのまま有耶無耶となつた。

天は少年に味方し、少女に敵した。
だが

「姉さん、一枚噛まねえかい？」

あの騒動から少しだけ経過した後、一つの部屋に一人の少女と一匹の獣が居た。

その一人と一匹は先ほどの騒動の中心にいた存在。

「契約成立だね」

「OKOK。俺たちへの取材も今後姉さん一人に独占させるべ」

そんな会話がその部屋では成されていた。

場所は変わり旅館のロビー。

そこにはもう一人の騒動の中心であった少年と、昨日の事件の時、共に行動した少年の従者と神鳴流の剣士の三人が居た。

「魔法がバレたつ！？」

「ええ、カモ君が少し油断して……。まあ僕にも原因があつたんですけど。一応証拠であろう携帯電話は悪いとは思いつつも破壊しましたが」

「破壊つて……、結構思いきつたことするわね」

少年の変わりようには少女一人は少しだけ顔を引き攣らせる。
こちらへ来た当初の純真無垢の少年はどこに行つたのだろうか。
まあこちらの方がこちらに実害は無いと少女達は安心しているわけだが。

「おーい、ネギ先生ー！」

「ここに居たか兄貴つ！」

少年に問題視されていた一人と一匹がその場に現れる。

少女の肩にオコジョ妖精は乗り、あろうことか人語を話していた。
それを少年の従者は咎めるが、効果は無く。仕方がないと思い問題であった少女に注意するが

「大丈夫大丈夫。報道部突撃班、朝倉和美。カモっちの熱意に絆されてネギ先生の秘密を守るエージェントとして協力していくことにしたよ。よろしくね」

「本当ですか……？」

疑い気味の少年先生の声に快く返事する少女。

その手には今まで集めてきたであろう少年の秘密の写真があった。

「今まで集めてきた証拠写真も返してあげる。ハイ

「あ、ありがとうございます……」

釈然としないままも、一応証拠写真などを返してくれたことなどもあり、一応ではあるが少女の言い分を信用する。

それは周りの二人も同じようで、疑わしいなあという視線を少女に寄越す。が、少女はそれだけでは怯まない。

追撃を掛けようとした少年の従者が口を開こうとしたが、瞬間にクラスマイトがやって来てそれは断念することになる。

また狙つたかのように彼女達の後に他の教職員達もやって来て、その場はそのままお流れということになった。

そして

「フフ、どう? うまくいったでしょ」

「流石は姉さん。作戦通りだぜ」

少女の甘言に惑わされ、少女のクラスメイト達は馬鹿馬鹿しい催しに参加することに決まった。

それは一人の人間と一匹の獣の利害が一致した結果によるもの。その二つの存在は誰にも害は発生することないと頭の中では思っている。だが、それは間違いなのだ。

「フフフ、ラブラブキッス大作戦とは仮の姿……、その実態は

獣はどこに隠し持っていたのか、突如三枚のカードを少女に見せびらかす。

「^{パクティオ}仮契約カード大量GET大作戦さつ！」

「ほほー、これが豪華賞品のカードか……。これを沢山集めればいいんだね？」

「おうよ。オリジナルはネギの兄貴が持つてるけどな。これは俺の力で作ったパートナー用の複製さ^{パレ}」

一度話したその内容を、もう一度少女の頭に叩き込むかのように説明する。

「既にこの旅館の四方には魔法陣が描いてあるべ。これで旅館内で兄貴とチューしたら即仮契約成立！」^{パクティオ}

何だかんだ言って、何気にこのオコジョ妖精の力は強い。

普通のオコジョ妖精ならば四辺に魔法陣を連続で描き、それを維持することなどは不可能。それだけ、このオコジョ妖精の力の強さと扱い方が早い証拠なのだ。

ただ問題なのが力の使い方を間違っていると言つところか。

「カード一枚につき五万オコジョ\$儲かるから……、あわわ俺ら億万長者だぜ、姉さん」

「ヒューヒュー」

そして賽は既に投じられ、後は坂を転がり終えるのを待つのみ。それがどのような結果を齎すかを、まだ誰も知らない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5303r/>

面倒事が嫌いな少年

2011年6月21日19時11分発行